湘南ペガサスのあゆみ

第２集（平成５年～１４年）

平成１５年４月

湘南ペガサスサッカークラブ

目　次

巻頭言　柳川明信　1
代表挨拶　井上孝　2
お祝辞　桑田孝　4
お祝辞　鈴木中　5
追悼　大内健嗣さん　松本好且　7
追悼　佐伯修三さん　佐野碩　8
監督の回想
1．湘南ペガサス（クラブ内呼称「ジュニアチーム」）
1．1　監督の悩み　田部井徹　9
1．2　ペガサス入会から10年をふりかえる　浅倉泰　9
1．3　ジュニア監督の思い出　関佳史　11
1．4　ジュニアと呼ばれる四十雀　元松経男　12
2．湘南ペガサスシニア
2．1　平成5年度の活動報告　中原弘巳　13
2．2　現場呼出し役　篠田亮　14
2．3　平成8年度の活動報告　山本修　15
2．4　監督の記　植田興義　16
2．5　監督の記　山本豊　17
2．6　サッカーに魅せられ40年　福井民雄　17
2．7　監督の記　阿部裕　18
2．8　湘南ペガサスチームと出会って　北原章　18
2．9　シニアチーム五十雀リーグ監督として　牧村英樹　19
3．湘南ペガサス60
3．1　平成12~13年度の活動報告　中原弘巳　20
3．2　平成14年度の活動報告　同上　21
湘南ペガサスシニアチームの渉外担当として　山本修　22
シニアリーグとの関わり（審判活動を通して見たシニアサッカー）　渡嶋九州夫　26
随想
1．雨の日の思い出　伊通元康　28
2．私とサッカーの出会い　伊藤貞夫　28
3．サッカーつれづれ　黄瀬直彦　29
4．飾リーグ雑感　坂部治郎　29
5．25年目の思い　田中聡　30
6．湘南サッカーと共に　遠見治　31
7．15年間の思い出　藤田勉　32
8．フレッシュマンの今　水上雅樹　32
あとがき　33
資料
1．年譜　1
2．役員推移　2
3．ユニフォーム変遷　3
4．湘南サッカーと鈴木先生　5
5．戦績
5．1　郡市四十雀リーグ　6
5．2　郡市五十雀リーグ　15
5．3　ペガサス60　18
6．会員名簿
6．1　湘南ペガサス（クラブ内呼称「ジュニア」）　21
6．2　湘南ペガサスシニア　22
6．3　湘南ペガサス60　23

巻頭言

湘南ペガサス２５年

シニアチーム会計担当　　柳　川　明　信

昭和５３年（'７８）に単独のチームを結成して以来２５年の歳月を経て「湘南ペガサスサッカークラブ」として、４０代「湘南ペガサス」、５０代「湘南ペガサスシニヤ」、６０代「湘南ペガサス６０」の三代約１００名を擁するクラブにまで発展して来ました。

この間、県下の中高年サッカーの拡大活性化の中核を担い活躍して来ました。会員諸君と共にこの 25 年と言うひとつの区切りを祝いたいと思います。

このように発展してきたのは、時代が日本にサッカーの風をもたらした背景と共に　つぎのようなことが考えられます。

1．メンバーの年代交代が重複しながらスムースに移行したこと。
当初の４０代が５０半ばとなると体力相応のゲームを求め、並行して４０代が増えゆとりをもって２チームに。同じように６０代へと移行し、且つ高年齢のメンバーがどのチームにも参加できるように運営に幅をもたせたこと。
またその過程で４０代と５０以上を別々の組織にして簡素化しながらも、５０歳になればシニヤに移行できる繋がりをもったこと。

2．新メンバーの加入に幅をもたせたこと。
「来る者拒まず、去る者追わず」とは故岩淵さんの言葉。４０歳になった湘南ＯＢに積極的に参加を求めて年代を継続させると共に、ＯＢ以外の同好の士も多く加入してもらい、これがチームの戦力強化と活性化、人的交流の向上に繋がったこと。

3．ゆるやかな運営方針と携わった人の努力があったこと。
ベースに湘南ＯＢの先輩、後輩の流れがあるものの任意のクラブでは強制はできず（合意と話し合い）を基本とし、ややアバウトながらゆるやかに運営してきたこと。そして皆働き盛りの年代ながら運営に努めてきたメンバー、長く代表兼庶務雑事、苦情聞き役を務めてくれた故大内君を初め、歴代の幹事諸君、現幹事役員、４０代の肝煎り役、グランドでのリーダー役、多くの縁の下の力持ちの努力があったこと。

結果として県下のみならず、５０代は全国大会を目指す程の実力とメンバーを有し、６０代はこの２,３年急速に広がってきた広域の大会の主要クラブになっています。サッカーを通じ相互の親睦、心身の健康増進というクラブの目的は満たされ、グランドに集う諸君の溌剌とした笑顔は素晴らしいものです。また発祥の趣旨である（湘南高校サッカー部）を支援するということに賛同を得た人々の集いとしても定着し、結成当時故岩淵さんから託された現役を支援する組織になりました。これはまた桑田先輩をはじめ（強豪湘南中学）の流れに繋がり、現ＯＢ会長としても感謝している次第です。

今後も継続して行くためには４０代メンバーの確保、６０後半以降の展望などあると思います。会の運営も鈴木先生の教え子ＯＢ中心に進めてゆくことになりますが、年代差からくる意見、考え方の相違など十分な意思の疎通をはかり発展してゆく事を希望します。

（ペガサス結成時発起人代表　現サッカー部ＯＢ会長　昭和２７年　湘南高卒）

代 表 挨 拶

「良い思い」 ― ペガサス２５周年に想う

湘南ペガサスサッカークラブ 代表 井 上 孝

「湘南ペガサス」の発祥についてはすでに幾度も述べられているが、今日、そのメンバーの経歴はある程度多様化してきたとはいえ、その７０％を湘南高校サッカー部のOBが占めていることは事実である。ある高校のサッカー部OBで、そもそもこの年齢までサッカーをやる者がこれだけいるということ、そしてそれが組織化されていることは特筆に値すると同時に、当然そうなる原因があるはずだと思う。なにかを持続するには、それに関して「良い思い」を経験することが必要なのではないか。かつて、ロンドン大学経済学部の森嶋通夫教授は、イギリスの教育が素晴らしいのは、良い人材が教育分野に行くからであり、その原因は学校で「良い思い」をした人たち（必ずしも成績の意味ではなく）が、同じ思いを与えたいと考えるからである、と述べていた。そう考えるとき、上の事態は「良い思い」の原点を多分湘南サッカーにもっているのではないかと思う。それは、サッカーそのもの、仲間、指導者、雰囲気、そして伝統に依るのであろう。

「伝統」というのはまことに捉えどころのないものだが、それを支えるものの一つとして行事やシステムがあるかもしれない。高校生のときなどは、その効用にまったく気付いてはいなかったが、毎年１月１５日に行っていた「蹴球祭」の存在は大きいと、年齢を経るにつれて思うようになった。高校生にとっては、２５歳も３５歳も同じように見えるが、さすがに５０～６０歳の先輩となれば、「ああいう歳で、あれだけ夢中に、楽しそうにできるのか」という見方をする。「蹴球祭」に現役やOBで参加しているうちに、自分もあの先輩たちの年齢までサッカーをやるということが当たり前のように思えてくるのではないか。久し振りに、当日、湘南のグラウンドに来てそういう光景を見ると同時に、OBが構成している各世代のチームの存在を知って、「そうか、また始めよう！」ということになる。こうして、ペガサスに入ったOBは幾人もいる。

「よい思い」は、もちろん蹴球祭だけではなく、湘南での３年間のすべてにわたる。部史に残る成果を挙げられれば言うことはない。多分、勝った思い出がもっとも「よい思い」になるだろうから。しかし勝利ばかりでなく、多面的な「よい思い」を若人が味わい、そしてその思いが最後にはペガサスでのサッカー参加に通じるならば、よいことである。そうした意味で、OBとして現役を支援することがペガサスにとって重要であるという認識から、湘南ペガサスの「会則」に、敢えて「湘南高校サッカー部に対する支援」の一項を盛り込み、メンバーに承認されているわけである。

「良い思い」には、指導者ももちろん欠かせない。ペガサスのメンバーの中では、ほんの数人ではあるが、昭和３０～３６年にかけて、岩淵先生とともに宮原先生に指導されている者がいる。 当時、全盛時の東京教育大学のサッカー部で活躍された宮原先生は新卒の青年教師で、われわれの眼を見張る技術・体力によって、一流のサッカーとそれへの憧れを示してくださった。そして、なによりもわれわれに対して、つねに一個の人格として対応してくださったと思う。乱暴な言葉や、罵声を浴びた記憶は無い。あとから振り返ると、先生は、自らが旧制中学最後の世代であったろうし、学校は違っても、あるいはわれわれに後輩としての接し方をしてくださったのかもしれない。そうした意味では、岩淵先生にもまたその雰囲気を感じさせるものがあった。サッカーを紳士のスポーツというならば、これもまた「良い思い」のひとつであろう。

どんな組織であれ、それがヴォランタリーなものである限り、根気強く、献身的に尽くしてくれる人がいなければ、決して継続されない。その点で、わが「湘南ペガサス」における故・大内健嗣氏の存在と功績を疑う者はだれもいない。いま、アルバムを繰ると小生が高校生の時の蹴球祭での集合写真に大内先輩も当然写っており、その出会いもまた蹴球祭であったことがわかる（もっとも、大内さんは試合にはよく応援に来てくださって、われわれに「大人の大学生」への憧れをもたせてくれたが、これもまた「良い思い」）。約２０年前の肺の大手術から不死鳥のように蘇って、２０数年間のペガサスを支えてくださったが、この記念誌に自ら登場しえないのは、真に残念である。改めて、ご冥福と感謝の意を表したい。

さて、「湘南ペガサス」結成時には、３０～４０歳台だった者たちが、すでに６０歳以上になって、仕事の面でも次々と現役を退くようになってきた。わずかにゴルフ、テニスなどを除けばクラブ組織のほとんどないわが国にお

いて、リタイア後の人生で趣味を同じくする仲間たちと年中顔を合わせられることは素晴らしい。毎日家にいるようになったからとて、急に地域社会に溶け込めはしない。とはいえ、高齢化社会、先は永い。サッカーの仲間たちとの付き合いは真に嬉しく、頼もしくなるはずであり、これからペガサスが一層その存在意義をわれわれに与えてくれると思う。サッカーにおける「良い思い」は、経歴の違いはあっても、ペガサスのメンバーに共通なものであろう。この多様なメンバーが、クラブ結成５０年目に、このクラブで「良い思い」をしたから続いてきたのだ、と思うようにしたい。クラブライフを楽しむには、もちろんその本拠地があるのが理想であろう。「湘南ペガサス・サッカークラブ」がグラウンドとクラブハウスをもてるようになったら素晴らしいだろうなあ、と夢のようなことを考えている。

（湘南高校サッカー部ＯＢ会副会長　昭和３６年湘南高卒）

お 祝 辞

ペガサスシニアチームの今後共の活躍を祈って

前サッカー部ＯＢ会長　　桑　田　　孝

湘南ペガサスは、昭和５３年、新制高校ＯＢの２７回から３５回までぐらいを中心に結成されたチームなので、その頃４０歳の者でももう６５歳過ぎとなり、その活動も下り坂になって来ているのではないかと思っていた。

ところが、「今年１２月　発足２５年を迎えるので活動の記録を残しておこうと思っている　一筆書いて欲しい」と言われ送られた資料を見て驚いてしまった。

平成１３年の神奈川県の四十雀リーグは、一、二部各１２チーム、三部１５チームで、総当りリーグ戦をしている。平成３年ペガサスより分かれ、５０歳以上の者でつくられたペガサスシニアチームは三部に属し、１４試合という苛酷な日程をこなしているのである（ペガサス本チームは二部所属）。その上このチームは平成９年より出来た神奈川県の五十雀リーグ（１０チームのリーグ戦）、更に５０歳以上を対象に開催されている古河マスターズ大会、全国シニアサッカー大会、刈谷スーパーエイジサッカー大会等出られる試合は全部出ているのである。

“本当に　よくやるよ！”である。ほとほと感心するばかりである。おそらくシーズン中の土日はサッカー漬であろうと想像する。気狂いぶりもここまで来るともう本物である。到底旧制の連中の及ぶところではない！！

ペガサスチーム発足時の中心だった２７回から３５回卒の連中は、“湘南サッカーの主”と言われたガンブチさんが昭和２８年湘南に戻り、定時制の英語の先生として教団に立ちながら毎日グラウンドに出ていたときの連中であり、発起人の一人である柳川君〈２７回卒〉が岩渕さんの指名でコーチをしていたときの連中でもある。また、昭和３０年になると宮原先生が着任（昭和３５年まで就任）、今までのＯＢが監督・コーチという時代から先生による指導・監督にと変わって来た時代の卒業生でもある。

昭和５３年１２月１７日のチーム発足の試合后、洗心亭で開かれた旗揚げの会に岩渕さんと宮原先生が出席されたいへん嬉しそうにしておられたと言うのも尤もである。

それからの湘南は、鈴木中先生（昭和３６年～平成元年の２８年間）の時代　イクォール　ペガサス本チーム。

藤塚先生（昭和５９年～平成８年の１２年間）　イクォール　湘南トトカルチョと続くのである。

それらのことを考えると岩渕さんや宮原・鈴木・藤塚先生達の影響が大きいことがよく判る。本当にそれらの人たちは湘南に大変な財産を残してくれたものである。

現在ペガサスシニアチームは合計７４名の会員を擁しているが、五十雀リーグを中心として活動している人は実質４０名とのことである。そのなかで６０歳以上のものが２０名以上もいる。今やサッカーは生涯スポーツとなっている。その先駆者としてペガサスシニアチームのメンバーの今後共の活躍を心より祈っている。

（前湘南高校サッカー部ＯＢ会長　第１回国体優勝チームメンバー　昭和２２年旧制湘南中卒）

編者注：ご寄稿お願いの際　ペガサス全体の記録であることの説明が不足でした

お 祝 辞

ペガサス創立２５周年に寄せて

湘南高校サッカー部　元顧問　鈴　木　　中

「創立２５周年」お目出とうございます。最近は殆ど一緒にボールを蹴る機会もなく、メンバーの方ともご一緒する事も少なくなったので、皆様に何かの参考になればと思い、この機会に「自分史・湘南高校サッカー部史・県サッカー協会史」のほんの一部を書いてみました。

ペガサスを語るには先ずは　亡くなられた「岩淵先生」から始まります。
先生は大変頑固な方でしたが、誰よりも強く「湘南高校サッカー部」を愛した人です。（昭和５５年：'８０年３月４日没　７０歳）

＊　昭和３７年:（'６２）　私が湘南に赴任したのが２６才の時でした。その時の卒業生３７回（３年４名）は牧村・小林・大林・荻野でした。３８回・長谷川他７名
３９回（東京ｵﾘﾝﾋﾟｯｸの年）・小泉他７名この３年間は「秋田国体」「岡山国体」「正月・西宮の全国大会」等県代表になり思い出の多い時代でした。
昭和４０年（'６５）（私の３０才の時）４０回・山田他１３名、４１回・二木（旧姓井出）他１３名、４２回・広野他１１名、４３回・加納他９名、この時代は「水戸の関東大会優勝」「正月・京都の全国大会」出場等県内では敵無しの素晴らしい記録が残っています。

＊　昭和４４年（'６９）　４４回・桑本他１１名、初めての女性マネージャー小泉さんがいました。懐かしい時代でした。４５回・浅倉他７名、４６回・上野他１５名、４７回・小林他１２名、４８回・曽我・瀬戸（国体代表）他１３名、４９回・梁他１３名、５０回・六角他１５名、非常に部員が多くなってきました。私も４０歳になり学校内でも中心的立場で校務に関与しなければならなくなり、クラス担任等の仕事が増えて多忙になった時代でした。５１回・高橋他１４名、５２回・志水他１４名八木（国体代表）宮井（女子マネージャー・ドイツ在住）等がいました。

＊　昭和５３年（'７８）（県サッカー協会・５０周年）５３回・武藤他１１名、この年に「ペガサス」は生まれ、今年で２５年経ちました。当時４０歳台のOBのメンバーは私と同年輩以上の昭和２０年代卒・旧制中学・新制高校初期の方々で現在「六十雀～」の方が中心だったと思います。殆どが「ガンさん」の教えを受けた戦後湘南が強かった時代で関東の大学リーグで活躍された方々が中心になってスタートしたのではないかと、思い起こされます。
その後５４回・篠塚他１４名、５５回・石外他２０名、５６回・水上他２３名、５７回・沼田他１１名、今年で年齢が４０歳を超えるのではないかと思いますが、「生涯スポーツ」と言う目的に沿って、昔の名前には関係無く体力に自信がある人は是非「四十雀」をお勧めします。
５８回・鷹岡他１７名、５９回・神崎他１４名（関東大会出場）、６０回・浜口他１８名、６１回・前田他１６名、６２回・田中他２１名、６３回・中沢他１１名が昭和の最後のメンバーになります。彼等も、もう直ぐです。「四十雀」で蹴るようになるでしょう。是非「ペガサス」に誘って下さい。重ねてお願いします。

＊　平成元年（昭和６４年'８９）　正月に「６回目の全国大会出場」したのが私の湘南高校教諭としてボールを蹴った最後の年になりました。６４回・若木・田村（国体代表）他２２名が現在「神奈川県社会人リーグ２部」の「湘南トトカルチョ」と言うチームで頑張っています。此方も若手を補強して良い結果を残して欲しいと願っています。
紙面の関係で２８年間全てのメンバーの氏名は書けないのでキャプテン他・・名としましたがその代の主将の方は是非仲間をまとめて欲しいと思います。集まりがあれば連絡を下さい。何時でも顔を出すつもりです。湘南を出てから「荏田高校教頭・平安高校校長・海老名高校校長」と９年間の管理職を務め、３８年間の教員生活を無事卒業する事が出来ました。*（編者注：先生ご提供の年表を資料として収載）*

＊　平成8年（‘９６）　退職、神奈川県サッカー協会の理事長として最後の仕事に精を出しています。平成１０年：’９８年「かながわ・ゆめ国体」を無事終える事が出来、「２００２・FIFA ワールドカップ」を大成功裡に終えて一息ついています。

＊　平成１５年（‘０３）　「県サッカー協会創立７５周年」の年になります。「ペガサス創立２５周年」と重なり記念すべき年になりました。日本サッカー協会も神奈川県サッカー協会も「シニアの部」の将来を見据えてここに力を入れて行きます。我々の仲間「中原弘己氏」が協会のシニア委員会のメンバーでもあり、「ペガサス」が神奈川県をリードして欲しいと思います。

勿論チームの実力も強くなければなりません、組織作り、ボランティア活動，大会運営等々シニアとして生涯スポーツの見本になるような活動を期待しています。その為にはメンバーの健康と体力作りが目的になると思います。**「ウエートオーバー　暴飲暴食　煙草の吸いすぎ　には十分注意しましょう。」**若い頃と違って無理がききません。耳の痛い方も居るかと思いますが、**「良いサッカーをやって」「良い汗かいて」「健康で長持ち」「ピンピンコロリ」**で長生きしましょう。

最後になりますが現役の「スペイン遠征」に対し多額のご援助を賜った事にこの場を借りてお礼申し上げます。遠征は「イラク戦争勃発の為中止になりました」が次の機会に遣わせていただきます。有難う御座いました。

これからの「ペガサス」の活躍を祈念します。

（編者注：先生の湘南サッカーとの関わりを資料として収載）

追　悼

大内健嗣さんを偲んで

シニアチーム　　松 本　好 且

大内健嗣君が逝ってしまってから早いもので２年が過ぎてしまいました。"湘南ペガサスサッカークラブ"が２５周年の節目を迎えたこのお祝いのときに、彼と一緒に喝采を叫び、祝杯をあげることが出来ないのが残念でなりません。

２５年前、柳川先輩の東京栄転を祝う酒席で集まった、大内君、牧村君、岡田君、達と「４０才代でチームを作ってまたサッカーをしよう。」の話が決まった時のこと。報告と許可をいただく為に二人で岩淵先生のところへ行き、そこでお茶の用意までして待っていてくださった先生から「是非やってくれ」とユニフォームもいただき、鈴木先生に電話をされ初試合の相手、グランド、日時まで決めていただいた時のこと。初戦に勝って発会式を「洗心亭」で行い、"湘南ペガサス"の命名を受けた時のこと。また二人は小学校で子供達のサッカーをみていたこともあり。（この時ペガサス第４代目の監督をした宮杉君とも知り合いました。）

彼大内君と私のサッカーを通じての思い出を書き出すときりがありません。

我々の現役時代は旧制中学最後の入学生、柳川さん、栗原さん、山本さん、達が卒業された後で、コーチとして柳川先輩が毎日来て下さっていました。（本当に毎日でした。雨の降っている日もでした。）

最初は大内君は６番（左ハーフバック）をつけていたので、柳川さんからは「大内、右足でボールを蹴る事は禁止！」と云われていました。結果、彼は右利きの左足使いになったのです。後日、その効果は充分あったと思い出します。

当時のフォーメーションはフォワード５人、ハーフバック３人、フルバック２人の今流に書くと"２－３－５"のシステムでのチームがほとんどでしたが、湘南はフォワードを４人にしてスイーパーを置く"１－３－２－４"と云うフォーメーションを岩淵先生が考案され、ボルトシステムと呼んでいました。（これは昭和３１年から３５年まで当時の若手ＯＢチーム：フェニックスでも使っていました。）

この時大内君はフォワードになり、前４人の１１番が大内君で９番が中原君です。これで対戦相手が４人のフォワードに戸惑っていたためもあり　それなりの戦績をあげ、当時県内では小田原高校と常に優勝を争っていたのですが、昭和２９年７月の神宮競技場（現国立）での東日本大会に出場し、　１回戦で本荘高校、２回戦で館林高校に快勝、そして準々決勝は教育大付属高校との試合になり、雨の絵画館前の田圃のようなグランドで"０－４"の惜敗（？）でした。これが当時の実力でした。

この大会では大内君は２得点あげていますが、２本とも強烈なミドルシュートで後ろにいる我々には彼が蹴る前に　「やった！入った。」と確信させるクリーンシュートでした。今でもあの時の彼の少し照れた様な笑顔が思い出されます。

そして"湘南ペガサス"結成後の揺生期に大内君が居なかったら今のペガサスはなかったと云えるでしょう。

昭和５３年の呼びかけに応じて集まったのはサッカー大好き男たちでしたが、サッカーはしたいがその為の雑務は無理と云う働き盛りの"４０代"ばかりでしたから。彼がしていた仕事量は大変なもので、名簿の整理、試合の通知、相手チームとの連絡、グランドの手配、試合会場でのポジションの割振り、クレームの処理等々、クラブ運営のほとんど総てを一人でしていたと云っても過言ではないと思います。

彼は非常に几帳面な男ではありましたが、これだけのことをするには淳子夫人の多大な協力があったのだと考えます。また、年に何回か会員相互の親睦と交流の場として彼は自宅を開放"意見交換の宴"も行っていましたから夫人のご苦労は大変だっただろうと、感謝あるのみです。

大内君、君は"湘南ペガサスサッカークラブ"の代表としてよくチームをまとめてくれていましたね。君の長年にわたる尽力の甲斐あって、今ペガサスは幹事の分業制を確立した組織を持つクラブチームとして湘南サッカーＯＢ会の中核としても機能しています。安心して下さい。これで故岩淵先生のご希望にもそえたわけですから。ＯＢ会の会長も故天野さん、故安保さんから、桑田さん、柳川さんとなり、これからも次々に続いていくと思います。

高い天国からで結構です、末永く見守っていて下さい。そして時々は私と祝杯をあげましょう。乾杯！

（昭和３０年　湘南高卒）

追　悼

大内健嗣さんを偲んで

シニアチーム　　松　本　　好　且

大内健嗣君が逝ってしまってから早いもので２年が過ぎてしまいました。“湘南ペガサスサッカークラブ”が２５周年の節目を迎えたこのお祝いのときに、彼と一緒に喝采を叫び、祝杯をあげることが出来ないのが残念でなりません。

２５年前、柳川先輩の東京栄転を祝う酒席で集まった、大内君、牧村君、岡田君、達と「４０才代でチームを作ってまたサッカーをしよう。」の話が決まった時のこと。報告と許可をいただく為に二人で岩淵先生のところへ行き、そこでお茶の用意までして待っていてくださった先生から「是非やってくれ」とユニフォームもいただき、鈴木先生に電話をされ初試合の相手、グランド、日時まで決めていただいた時のこと。初戦に勝って発会式を「洗心亭」で行い、“湘南ペガサス”の命名を受けた時のこと。また二人は小学校で子供達のサッカーをみていたこともあり。（この時ペガサス第４代目の監督をした宮杉君とも知り合いました。）

彼大内君と私のサッカーを通じての思い出を書き出すときりがありません。

我々の現役時代は旧制中学最後の入学生、柳川さん、栗原さん、山本さん、達が卒業された後で、コーチとして柳川先輩が毎日来て下さっていました。（本当に毎日でした。雨の降っている日もでした。）

最初は大内君は６番（左ハーフバック）をつけていたので、柳川さんからは「大内、右足でボールを蹴る事は禁止！」と云われていました。結果、彼は右利きの左足使いになったのです。後日、その効果は充分あったと思い出します。

当時のフォーメーションはフォワード５人、ハーフバック３人、フルバック２人の今流に書くと“２－３－５”のシステムでのチームがほとんどでしたが、湘南はフォワードを４人にしてスイーパーを置く“１－３－２－４”と云うフォーメーションを岩淵先生が考案され、ボルトシステムと呼んでいました。（これは昭和３１年から３５年まで当時の若手ＯＢチーム：フェニックスでも使っていました。）

この時大内君はフォワードになり、前４人の１１番が大内君で９番が中原君です。これで対戦相手が４人のフォワードに戸惑っていたためもあり　それなりの戦績をあげ、当時県内では小田原高校と常に優勝を争っていたのですが、昭和２９年７月の神宮競技場（現国立）での東日本大会に出場し、　１回戦で本荘高校、２回戦で館林高校に快勝、そして準々決勝は教育大付属高校との試合になり、雨の絵画館前の田圃のようなグランドで“０－４”の惜敗（？）でした。これが当時の実力でした。

この大会では大内君は２得点あげていますが、２本とも強烈なミドルシュートで後ろにいる我々には彼が蹴る前に　「やった！入った。」と確信させるクリーンシュートでした。今でもあの時の彼の少し照れた様な笑顔が思い出されます。

そして“湘南ペガサス”結成後の揺生期に大内君が居なかったら今のペガサスはなかったと云えるでしょう。

昭和５３年の呼びかけに応じて集まったのはサッカー大好き男たちでしたが、サッカーはしたいがその為の雑務は無理と云う働き盛りの“４０代”ばかりでしたから。彼がしていた仕事量は大変なもので、名簿の整理、試合の通知、相手チームとの連絡、グランドの手配、試合会場でのポジションの割振り、クレームの処理等々、クラブ運営のほとんど総てを一人でしていたと云っても過言ではないと思います。

彼は非常に几帳面な男ではありましたが、これだけのことをするには淳子夫人の多大な協力があったのだと考えます。また、年に何回か会員相互の親睦と交流の場として彼は自宅を開放“意見交換の宴”も行っていましたから夫人のご苦労は大変だっただろうと、感謝あるのみです。

大内君、君は“湘南ペガサスサッカークラブ”の代表としてよくチームをまとめてくれていましたね。君の長年にわたる尽力の甲斐あって、今ペガサスは幹事の分業制を確立した組織を持つクラブチームとして湘南サッカーＯＢ会の中核としても機能しています。安心して下さい。これで故岩淵先生のご希望にもそえたわけですから。ＯＢ会の会長も故天野さん、故安保さんから、桑田さん、柳川さんとなり、これからも次々に続いていくと思います。

高い天国からで結構です、末永く見守っていて下さい。そして時々は私と祝杯をあげましょう。乾杯！

（昭和３０年　湘南高卒）

追　悼

佐伯修三さんを偲んで

シニアチーム　佐　野　碩

佐伯さんは、平成１３年の郡市リーグ戦（５０才以上）に秋まで活躍し、納会には「不整脈の検査を続けている間は休みますが、試合の観戦や会合には参加します」と何時ものように元気に歓談していました。
然し、翌年の平成１４年１月１８日に自宅近くでテニス中に倒れ、直ぐに入院治療に専念されましたが、ご家族はじめ、多くの方々の願い、再起の祈りも叶わず３月３０日に永眠されました。

還暦を迎え人生はこれから、そして湘南ペガサスシニアー５０才チームの助っ人に加え６０才チームの強力メンバーとして大いに期待されていたのに残念でなりません。

佐伯さんは中学時代（栄光学園）から始めたサッカーを人生の友とし、その強靭な身体は「鉄人」とも言われていました。
ペガサスに参加した平成３年以降、同世代の井上会長と共に守りの要に徹し、大胆な接触プレーで起り勝ちな感情的場面で、彼は、いつも冷静に対応し、模範的なフェアープレーヤーでもありましたので、チームの逸材を失った思いです。
ご家族のお話では、サッカーの試合があるときは、いつも「上機嫌で」出掛けていたと伺いました。
また、ご葬儀にはペガサスのユニホーム姿で旅立たれました。先年他界された故大内代表も同じユニホーム姿でお別れしたことを思い起こし、湘南ペガサスを終の仲間として、こよなくサッカーを愛していたことに感銘を受けました。天国では、大内さんとペガサスの試合を見ながら語り合っていることと思います。

佐伯さんを見送って一年が経ちました。謹んでご冥福をお祈り致します。

（昭和２８年　栄光学園高卒）

監 督 の 回 想

1．湘 南 ペ ガ サ ス （クラブ内呼称「ジュニアチーム」）

1．1 監 督 の 悩 み

平成５年～７年

ジュニアチーム監督 田 部 井 徹

今から約１０年位前になるが、湘南ペガサス（ジュニアチーム）の監督を３年間務めることになった。大学３年の時にキャプテンを務めた経験があったせいか、割と簡単に引き受けてしまったが、実際にやってみると結構これがシンドイものであった。学生時代には部員が４０人位いたと思うが、何しろ学年が物を言う時代であり、またサッカーを楽しむということ以上に、試合に勝つことが第一優先になっていたため、試合に出られる人、出られない人が当然いて、特に１年生なんかは、試合当日ボール運びだけで終わってしまうことがほとんどだったが、自分達も学年が上がれば、今の先輩のようにプレーできるという考えがあったためか、誰も文句を言わずに部活を共にしたものであった。

ところが社会人のクラブチームとなると、個々人のサッカーに対する考え方が異なり、試合の勝ち負けに徹底的にこだわる人、試合の勝ち負けより純粋にサッカーを楽しみたい人、ただ単に健康作りの観点から休みの日を利用して気分転換を図っている人など、人それぞれの考え方が混在する。そんな中で試合を行なう訳であるから、監督として誰しも一番頭を悩ますのが、メンバーの人選である。特にプレーイング・マネージャともなると、なおさらのことである。試合に参加する人数が１５人ぐらいであれば、何も悩むことはないが、参加人数が２０人以上ともなると、これはもう大変なことになる。試合の始まる前からスタメンはどうしよう、誰と誰を途中で交代させようかなど、試合前のアップもろくにできず、また試合中もプレーをしながら選手交代のタイミングを考えるなど、なかなかプレーにも集中できないのが現状であろう。

私が監督をしていた時の湘南ペガサスの場合も、例外ではなかった。この背景には、特にこの１０年ぐらいの間に、シニアリーグでプレーすることを望む人が、急激に増加してきたことがあげられる。サッカーを愛する仲間が増えることは嬉しいことであるが、反面、監督にとっては悩みの種にもなっている。

試合に来る人は誰しもが、今日は自分が試合に出て何かチームのために貢献しようと、やる気満々で来るわけである。ところがメンバーが大勢集まりすぎると、頭を悩ませるのが監督ということになる。試合に勝つことを優先させれば、何も全員のことを考えることもなく、当日のベストメンバーで試合に臨めばよい訳であるが、湘南ペガサスは従来から、試合に来た人はたとえ時間が短くとも、必ず全員が参加することをモットーに試合をしてきた。それでも当然ではあるが、試合をやるからには必ず勝ちたいと思ってやっているのであるから、これは欲張りとでも言うしかないのであろう。そこが監督として一番辛い所であり、勝てる試合をみすみす落とすという苦汁も実際に味わった。誰しも試合をやる以上は勝ちたいのは当たり前であるが、それ以前に誰しも試合に出たいというのが、メンバーの共通した願いである。だからこそ監督稼業は辛いのである。

ただ唯一監督が救われるのは、監督が決めたことに対し誰一人文句も言わずに従ってくれることである。これがなければチームとしての統制などとれるはずもなく、やがてはチームが分解しメンバーもそれぞれバラバラになって、同じ仲間としての活動が出来なくなる。やはり監督はいかに辛くとも、試合の勝ちにこだわりながら、全員を上手く起用することを考えるしかないのであろうか。

（昭和４２年 湘南高卒業）

1．2 ペガサス入会から１０年を振り返る

６年振りの３位入賞から１部転落まで

平成８年～９年

ジュニアチーム監督 浅 倉 泰

私がペガサスに入会したのは、40才を迎えた翌年平成４年（１９９２）の春です。同期の山口晴夫がＯＢ会の世話役をやっていた関係で、ペガサスのメンバーとも面識があり、一緒に入会しようとの誘いがありました。腕試しならぬ足試しに呼ばれたのは、確か４月頃の鎌倉四十雀との練習試合だったと思います。それまで、サッカーの方は会社（東急不動産）のチームに所属し、年に２回、東急グループの大会と不動産の同業者のリーグに参加する程度で、思い出したように試合をしていた状況でした。但し、４０才の記念にホノルルマラソンに挑戦しようと３９才の夏から走り込みを行い、結果的には直前に膝を痛めて参加を断念しましたが、サッカーを始めるだけの基礎体力はついていました。その下地があったからこそ、ペガサスに飛び込んでいけたのかも知れません。しかし、その年の古河マスターズにいきなり参加し、１日２試合の洗礼をうけて、サッカーはただ走るのとは大違いと言うことを身にしみて感じました。二日目は歩いて試合会場に行くのがやっとという有様でした。

そんな形でスタートしたペガサスでのサッカー遍歴ですが、２度ほど怪我でもう続けられないのではないかと思ったことがあります。最初は始めて２、３年目だと思いますが膝が痛くなって、なかなか直らずに鍼灸なども試みましたが、芳しくなく、これはサッカーを止めろということかな、などと落ち込んでいました。いろいろ調べてみると、膝の痛みを解決するには膝の周りの筋肉をつけるのが一番いいという事がわかり、スポーツクラブに通って、スクワッド等の筋力トレーニングに励みました。その甲斐あって、膝の痛みは解消していきました。

次は肉離れです。試合中に相手ボールをインターセプトしに前に出たとたんに、脹ら脛をバシッと後ろから蹴られたような感じがして、激痛が走りその場にうずくまりました。サッカー人生初めての肉離れです。肉離れは安静にして、完全に直るまで、無理をしないというのが唯一の治療法なのですが、ついつい中途半端な状態で運動を再開して、また同じところを傷めるということを何度か繰り返してしまいました。この時はテーピングに救われました。キネシオテープと普通のテープを組み合わせて、少々大げさにみえるかもしれませんが、試合前に必ず丁寧にテーピングをします。これによって、筋肉の無理な動きを押さえて、筋が切れるのを防いでくれるわけです。これを始めてから、一度も肉離れをやっていませんから、効果は絶大だと思います。肉離れをしやすい人にはお薦めします。

さて、怪我の話ばかり書いてきましたが、そろそろ本題に入りたいと思います。

私が田部井さんから監督を引き継いだのは、平成８年（1996）の第13回四十雀リーグからです。その前は７位、６位、６位と一部の中位に位置していました。横浜、神奈川、茅ヶ崎にはどうしても勝てず、その他取りこぼしで１、２敗するというパターンで戦績は安定していました。第13回リーグも同じような展開でしたが、このシーズンから加わった、アンテロープス出身の二見氏、藤田さんの紹介で加わった白井氏（１シーズンのみ）、及び前年から参加した関、福永両氏の４人の戦力が非常に大きな力を発揮し、横浜、神奈川、茅ヶ崎以外は取りこぼしをせずに５勝３敗１分けで第３位に入賞しました。勝った試合５試合の内４試合が１－０の試合とギリギリの所で勝ちを拾っての３位でした。４位の横須賀とは勝点は同点で、得失点差が湘南＋１点で、横須賀±０点での本当に僅差の３位でした。この３位入賞は第７回大会以来６年振りの快挙となりましたが、メンバーの実感としては、知らないうちに３位になっていたという感じだったのではないでしょうか。

平成９年（1997）は福井（民）、伊通、相羽氏がシニアに移り、新メンバーが10名入ってきましたが、旧メンバーとのコンビネーションがうまく噛み合わず、２勝５敗２分けの８位で危うく２部へ転落するところでした。

平成１０年（1998）は更に藤田、阿部、田部井、坪井氏などがシニアに移り、新旧交代のシーズンになりましたが、残念ながら新チームが旨く機能せず、１勝９敗、その１勝も不戦勝と実質的には全敗で終わり、２部への転落が決まってしまいました。

新メンバーへペガサスの戦い方を打ち出せなかった監督である私の責任が大きかったと思います。OB 以外の会員が多くなり、現役時代の湘南高校でのサッカーが暗黙の了解事項となっていた時代から、チームとしての戦い方を明示して試合に臨まなければ勝てない状況に変化していました。その点、私がバトンタッチした関氏はこの点を意識して取り組んでいただき、２年後の１部復帰を達成してくれました。このシーズンから、新メンバーが早くチームへ溶け込んでもらえるよう、出来るだけプレー時間を確保したいと思い、私の方からお願いして、５０才になる方はシニアの方へ上がって頂くことにしました。その際、きちんとした送別会も開催せずに、電話連絡だけで終わらせてしまったことは、今も心残りです。この場を借りて、諸先輩にお詫びしたいと思います。

私が監督をしていた間に印象に残ったイベントが二つあります。

一つはＪビレッジへの遠征です。メンバーの河西氏の紹介で地元福島の双葉四十雀ともう２チームが参加し、４チームで親善試合をやることになりました。平成９年（１９９７）年の７月にオープンしたＪビレッジの素晴らしい芝を一度踏みしめてみたいと、我々はバスを仕立てて朝７時に藤沢から出発しましたが、遠いこと、遠いこと。

今は高速がもう少し伸びているかもしれませんが、高速を降りて行けども、行けども到着しません。ようやく着いたのが午後１時半ですがそのころには、くたびれ果てていました。２度と車では行くまいと思いました。しかし、施設に入ると見渡す限りの芝のグラウンドで、ようやく日本にもこの様な施設が出来たかと、感慨ひとしおでした。その後行く機会は有りませんが、あと 10 年サッカーを続けていればペガサス６０の大会が有ると聞いておりますので、その時を楽しみにしております。

もう一つは御殿場、時の栖での合宿です。たしか当時シニアの方から「芝の素晴らしいグラウンドが有るから、一緒に行かないか」とお誘いを頂き、御一緒させていただきました。この時はグラウンドも素晴らしかったのですが、それ以上に地ビールとソーセージの味に皆感激しました。その時の印象が強かった為、シニアのサッカー大会の企画会社から、この施設を使った企画を提案されたときには、直ぐに申し込みをしました。それ以来ジュニアの秋の恒例行事となり、サッカー、温泉、地ビール、ソーセージを楽しみにして毎年参加しています。

メンバーとして、監督としてこの 10 年ペガサスに参加して来ましたが、何故これほど入れ込んでいるのかと自問することがあります。まあ、他にやることがない、仕事がさほど忙しくない、など消極的な要因がもちろんありますが、根本的には闘争心の発露にあると思っています。日常の社会生活の中ではなかなか正面切って勝負することは出来ませんが、ゲームの中では熱くなってファイトすることができます。この熱くなれる時間が私にとって、とても貴重な時間なのだろうと思います。

先日、昨年から加入した私の同期が、酒井大先輩の軽快なプレーを目の当たりにして、何だあの爺さんはと私に聞いてきました。ペガサスの現役最長老だと知って二度びっくり。これから先、相当長い道のりになりますが、私も酒井大先輩を目指してサッカーを続けていきたいと思います。

（昭和４５年　湘南高卒業）

１．３　ジュニア監督の思い出

平成１１年～１３年ジュニアチーム監督

関　　佳 史

先日、私の恩師で、湘南高校陸上部の元顧問、山田勉先生とお話する機会がありました。先生いわく「サッカー部はいくつになっても試合ができていいよな。本当にうらやましい。中年が本気で記録に挑む陸上競技は不可能だ。陸上部のＯＢ会はイコール飲み会にならざるを得ない。」まったく、自分では気が付いていませんでしたが、サッカーを年齢相応に楽しむことができるのは、とても幸福なことと改めて思います。この年齢になっても、グランドにたち、汗を流し、気持ちも体もリフレッシュでき、仲間と語りあえるスポーツができることは、大げさにいえば、会社や家庭とは別の大きな自分のテーマになっています。

４０雀リーグの組織が２０年、チームが２５周年を迎えるにあたり、まず、先輩がたの熱意とご苦労に感謝と敬意を表します。私たち、ジュニアチームの活動が順調におこなえるのは、リーグ組織やチームを作り、運営してきた皆さんがあってのことです。

さて、私は１９９９年、２０００年、２００１年の３年間、監督をやらせていただきました。世紀の変わり目であり、チームにとっても転機でありました。

１９９９年のシーズンは、初めて２部に降格した年でした。この年は、出足はよかったのですが途中でつまずき、立て直しがきかずに、5 位という不本意な成績に終わりました。２０００年のシーズンでは出足こそ悪かったものの、その後６連勝し、2 位を確保。1 部復帰を決めました。年間の失点４に象徴されるように、守備が安定。とくに元蹴売クラブのＧＫ野口さんは素晴らしいプレーをみせてくれました。２００１年は１部で結果 11 位と振るわず、再度降格ということになりました。若手、藤塚さんの前後の世代が集れば、かなりの力があるものの、忙しい中ベストメンバーがなかなか揃わず、歯がゆい試合が多い１年でした。

監督を最も真剣にやったのは、1 部のときでした。前のり偵察を行い、相手のフォーメーションと選手をチェックしました。（仕事で余裕があったのも幸いでした）成績は振るいませんでしたが、相手のフォーメーションを読んで、こちらの理想どおりに試合を運び、上位チームに勝った試合もあり、監督の面白さを感じました。ただ、夏の暑い日など、プレーしながら交代を考えていると、どうしてもうまく頭が働かず、時間がたってしまい、後悔することも多々ありました。交代の難しさは、いつも頭を悩ませます。勝負には勝ちたいと思いながらも、来てくれたメンバー全員を出したい。考えても解決できないことが多々ありました。

４０雀リーグ全体としては、チーム数が増加する中、社会人でずっと継続して３０代もやっているチームが新加

入してきます。また、関東リーグクラスで継続してやっている選手も見受けられます。一方、湘南ＯＢは、１０年くらいのブランクのある人が多く、勝負となると、非常に厳しいのが現実です。

また、チーム内の事情も大きく変わっています。ペガサスは、湘南高校ＯＢ主体のチームであるはずです。現在、登録メンバーでは、約半分がＯＢになってはいます。しかし、常時リーグ戦に出場している比率でいうと、３０％をきるぐらいになっているのが実態です。今後、数年にわたっても、新規ＯＢの加入見込みは１年に１人いればよい方とみています。従って、ＯＢ以外の参加者をどう受け入れていくかが大きな課題となるはずです。３～４年前までは、湘南ＯＢがかかわったアンテロープスから、かなりまとまった人数が加入してくれていました。現在は、幹事を中心に、個人的にやれそうな人に声をかけています。

チームのメンバーは皆さん、本当にサッカー好きです。そして、サッカーを継続していくことは大切なことです。真剣勝負も時には必要ですが、遊び心をもって、今後もサッカーを楽しみたいと思います。

（昭和４８年　湘南高卒業）

１．４　ジュニアと呼ばれる四十雀

平成１４年～現在

ジュニアチーム監督　　元　松　　経　男

過日、神奈川県郡市サッカー連盟主催のシニアリーグ創立２０周年祝賀会が藤沢市民会館で盛大に執り行われました。平成１４年度よりペガサスジュニアの監督を仰せつかった私も、チームの代表としてその祝賀会に参加しました。シニアリーグすなわち私たちの参加している郡市四十雀リーグは全国的にも初期の創立の歴史を持つとのこと。その参加チーム数も年々増え続け、今や４５チーム３部制（３部はA･Bの２グループ）となり、来年度はいよいよ４部誕生かとの勢いであります。そのような壮年サッカーの盛んな神奈川県の中でも、いち早く四十雀サッカーが始められたのが我が湘南ペガサスであり、郡市リーグの創世期から湘南ペガサスはリーグを盛り上げていたと伺っていました。

このような歴史のある「湘南ペガサス」の名前を私が初めて耳にしたのは、湘南クラブでボールを蹴っていた学生時代のＯＢ会だったと思います。その頃はまだ高校を出たてで体力もそこそこにあり、現役に胸を貸していたころでした。夏の合宿中のＯＢ会や正月の蹴球祭などで、大階段の上から四十雀の皆さんのゲームを珍しく眺めていたものでした。スピードこそ遅いけれども、しっかりとした技術で予想以上のハイレベルの試合だったものと記憶しています。特に安保大先輩のプレーや服部大先輩の軽やかなＧＫぶりが今でも目に浮かびます。それと共に、岩淵先生の怒鳴り声も思い出すのは私だけではないのではないでしょうか。こうした昔を思い出すに、今の自分たちの姿が現役の皆さんにどのように見られているのかと思い比べるとき、少し気恥ずかしささえ覚えてしまいます。

そのような、湘南高校サッカー部とそのＯＢ会と共に歩んでこられた、湘南ペガサスの諸先輩方の輪に初めて入れていただいたのは、平成８年でした。なんとその年のリーグ戦（もちろん群市１部リーグでしたが）では５勝３敗１引き分けで、堂々の３位入賞。私のサッカー歴の中で唯一、あの八咫烏マーク入りの賞状をいただいた記念すべきペガサスデビューの年でした。なんと強いチームなのだろうと思いつつ、「体力とテクニックの再構築に挑戦しよう」と誓ってその年のＯＢ会報にペガサス１年生の原稿を載せていただいたのがついこの間のような気がして仕方がありません。

そして、気がつくとペガサス入会後すでに７年がたち、その間リーグでは１部から２部へ転落し、すぐに返り咲いたものの、世代交代が思うようにいかず、リーグ戦での参加人数も不足がちとなり、再び２部に転落してしまいました。２部転落後の平成１４年には、それまで引き受けていた会計係りから突然監督に指名され、気疲れの多いシーズンを過ごしてしまいました。少年サッカーのコーチをやっているため、先発メンバー決めや選手起用は慣れているだろうとの理由から、監督を仰せつかったわけですが、いきなり連戦連敗でリーグ戦の最後まではらはらのし通しでした。最終戦でかろうじて２部にとどまった次第ですが、その詳細はＯＢ会報にも載せていただきました。

さて、こんなハラハラドキドキの郡市リーグではありますが、ペガサスジュニアにはたくさんの楽しみもありました。まずは、古河市マスターズサッカー大会。これは例年恒例の大会でしたが、ジュニアにとってはシニアや六

十雀の諸先輩方と同宿し、サッカー談義の一晩が約束された、年に一度の緊張の大会でした。高校の現役時代にも、大学生の湘南クラブの時代にも、いつも先輩に鍛えられ、叱咤激励されていたのが湘南サッカー部の伝統でしたが、ここでもその伝統は生きていました。近年は参加人数が集まらずに、シニアチームからの応援をお願いしての参加が続き、遂におしかりを受けて、昨年からは参加を見合わせています。またいつか人数をそろえて同宿の参加に踏み切りたいものです。

最近は御殿場マスターズへの参加が恒例化しています。秋の清々しい富士山の麓で天然芝でのゲームと、試合後の温泉と地ビール。これは堪えられません。普段、様々な形でご支援いただいている若手シニアの皆さんにも、ゲスト参加していただき、評判も上々です。是非、続けていきたい年中行事です。

そして、筑波大附属高校の定期戦や蹴球祭、小田原高校ＯＢ会との交流戦等々、１年中サッカーを楽しませてくれる湘南ペガサスの歴史と世代を越えた暖かな交流がこれからも代々末永く続くことを期待して、次の監督まで引き継ぎたいと思います。

（昭和４９年　湘南高卒業）

2. 湘 南 ペ ガ サ ス シ ニ ア

2．1　平成５年度の活動報告

平成５年度シニアチーム監督　中　原　弘　巳

平成５年は丁度１０年前です。当時のペガサスシニアメンバーは６１歳の酒井さんから５０歳になろうとしている牧村さんまでですから、今では丁度６０チームの年齢にスライドしています。実際その時の多くのメンバーがそのまま今のペガサス６０チームで活動しています。ペガサスは年齢の変化に応じて、ジュニアチームの編成や５０代、６０代チームのスタートとチーム活動の場を広げ、新しいメンバーを入れながら各人が継続的にペガサスの活動に参加してサッカーを楽しんで来たわけで、素晴らしいことと思います。

当時はまだ５０歳以上のチームが数少ない中で、ペガサスシニアはオーバー５０のチームとして、すでにスタート３年目を迎えていました。４０雀リーグ２部に参加しながら、５０歳代中心の試合を目指していた年です。山本修さん等の働きかけで、５０雀リーグのトライアルを開始したのがこの年でした。参加チームはペガサスの他に神奈川、藤沢、ＹＫ，小田原でしたが、ともかくこれが５０雀リーグの始まりで、その後数年して神奈川５０雀リーグの発足となりました。県外にも相手を求め、川口、浦和、東京、山梨の５０代チームと対戦しました。

湘南ＯＢとしては古くから旧制中学ＯＢチームとしての活動がありました。ペガサスとこの旧制ＯＢとの合同での試合も行っています。結果的に、これが旧制ＯＢチームをペガサスが引継ぎながら、ペガサス６０代チームを作って行くことに繋がりました。

４０雀リーグの戦績は２部１３チーム中１１位、５０雀リーグは１勝２敗１分け、全体では６勝１７敗９分けでした。戦績は芳しくありませんが、５０代の試合環境が充分でない中で多くの試合をやったと思います。

現在、小学生から高校までサッカーは広く普及しています。しかし、高校卒業後の競技人口はその割に多くないようです。３０代ともなれば、サッカーどころではないし、５０代になって再びサッカーは始め難いのが現状と思います。

ペガサスやＳＯＩの遠征で、訪れたオーストラリアや英国では、生涯を通してサッカーを楽しめるシステムがあるように思えました。彼らは、クラブ組織や自前の芝生グランドで日常生活の一部としてサッカーを楽しんでいます。サッカー協会も最近は地域クラブ作りを始めようとしています。岩淵さんもこれに通じることを考えておられたのかなと思います。日本の生活習慣や不十分な設備環境ではこのようなことを実現するのは難しいのですが、ペガサスの活動方法が一つの方法と思います。湘南を卒業しても、サッカーを生涯を通して続けることの出来るシステムを作りたいものです。

平成５年のチームに戻りますが、長年ペガサスをマネージした大内さんが、この年は連絡係りとともに毎試合元気な姿を見せていました。佐伯さんはペガサスシニア設立以来の中心メンバーとして堅実な守備を誇っていました。

サッカーをこよなく愛したお二人を失ったことは、まことに残念です。お二人のご冥福を祈ります。

（「６０」チーム監督　昭和３０年　湘南高卒）

平成５年度ペガサスシニア試合結果（県四十雀および五十雀リーグを除く）　＊は湘南ＯＢとの混成

	対戦相手	得点		
４月１１日	慶応ＯＢ	３－４	親善試合	＊
５月１５日	古川おじんＳＣ	０－２	40雀記念大会	
同上	大和四十雀	１－１	同上	
５月１６日	旭四十雀	０－１	同上	
同上	川崎四十雀Ｂ	０－７	同上	
５月２３日	荻野バイオレット	１－０	対女子ﾁｰﾑ	＊
同上	城北ラビット	６－０	同上	＊
６月２０日	慶応ＯＢ	１－１	親善試合	＊
１０月１７日	川口四十雀	２－０	川越50雀大会	
同上	浦和ﾊﾞﾙｽ	０－２	同上	
１０月２４日	慶応OB	１－１	親善試合	＊
１２月１１日	小田高50雀	０－０	小田原大会	
２月２０日	寒川40雀	０－７	40雀ﾄｰﾅﾒﾝﾄ	
３月２１日	東京40雀	０－１	東京大会	
同上	同上	０－０	同上	
同上	山梨40雀	１－１	同上	

（以上）

２．２　現場呼出し役

平成６年度シニアチーム監督　篠田　亮

平成６年度（‘９４）シニアチームの監督を仰せ付かりました。見識・技量共に相応しからざる者が務める事になりましたが、監督は気が向いたときだけ出て行きプレーを楽しんでいるわけには行かず、ＫＯ時には来ていなかった人をも含む当日参加者全員の出場のためプレー中もポジション別交代の時期を考えなければならない面倒な役割でもありますから、年回りから回ってきた呼出し稼業のお勤めとして仰せに従いました。

９年も前の事で定かではない記憶を辿って見ます。ジュニアチームが出来、ロートルは２部リーグに移り４年目、４０代中心のチームが殆どのうえ、此方は年々加齢し、苦戦が続いていた頃です。勝の期待が持てるのは事情同様の神奈川クラブぐらいと言う状況でした。今記録を見ると、２部参加の初年度から順に、１１チーム中９位、１２中１２、１３中１１位と来て、この年は１３中１２に終わっています。年の差は如何ともし難い、楽しめば良いとお思いかもしれませぬが、勝がなにより嬉しく楽しいものであることもおわかりでしょう。随分悩みクラブの先達にもご意見を求めたり、ペガサス通信に感想を記したり、留意したいこと（注参照）を呼びかけたりも致しましたが、先記の通り残念な結果に終わりました。ただこの頃から動き始めていた５０雀のゲームで好成績を納めたのは、４０雀での挑戦が体力の錬成になっていたおかげかも知れません。

省み、今とこれからに思いを致しますと、変わらぬ難問はペガサスのようなクラブでの競技力維持乃至向上は如何すれば良いかと言うことです。クラブ内の人間関係は現状でも満足すべき水準にあると思います。しかしそこそこには凱歌をあげて共に慶び楽しむ機会を確保し、「できたら今以上」を望むのは決して贅沢ではなく、ある意味ではスポーツクラブの性であり求心力の柱ではないでしょうか。他方　まだサッカーがマイナーで競技人口が少ない頃ではあったにせよ上位に在ったころの湘南高校ＯＢ世代ではそれなり成績を収めてもこれからは難しくなる一方と思います。

では如何すれば良いか。少年のころとの違いに目をつけてみたい。まずゲーム機会に恵まれています。またレヴェルの高いゲームを見聞できます。これは今からでもチームプレー能力を向上させる可能性を示唆していませんか。少し希望が見えてくるでしょう。ただこれだけなら他チームも同条件です。問題はプレーヤー相互間の連係です。日本人や高年者が共通して不得意なディスカッションを通じての相互理解が必須になります。プレー中でなければ

状況を再現できず互いの意思疎通が難しいこともあります。Ｅメールによる掲示板やメーリングリストなどの利用も文章化による抑制された表現が期待できるという意味で一策かもしれません。この辺り成果の挙がる話合いが出来るようになったところが勝利の美酒を多く酌めるようになるのではないでしょうか。ジュニアも含め当クラブの課題ではないかと考えます。（勿論個人で持久力や筋力維持の努力は心がけたいものです。）

回想には程遠い話になりましたが楽しいクラブを維持しつつプレーの喜びも極大にしませんか。

末筆になりましたが長くアフターゲームを共に遊んで下さった大内さんのご冥福を祈って、合掌。

（昭和３３年　湘南高卒業）

（注）サッカーで自ゴールを向いたＤＦは殆ど無力化します。これは攻撃の要諦を示唆しています。ボールの動き、人の狙いはここにあるべし。などと考えた当時の想いは今も変わっておりません。最近は、ポールウォッチャーとなってしまい絶間ない位置修正のないサッカーが気になっています。昔話にかこつけた戯言をご容赦下さい。

２．３　平成８年度の活動報告

平成８年度シニアチーム監督　　山　本　　修

湘南サッカー部ＯＢ会報に掲載の活動報告を、そのまま記念誌の寄稿とします。

１．湘南ペガサスシニア

神奈川県四十雀リーグの参加チームも年々増えて３０チームになり、平成８年度（‘９６）から、１部、２部、３部各１０チームの３部制となった。５０才以上の湘南ＯＢおよびその友人･知人で構成されている我が湘南ペガサスシニアチームは、参加資格４０才以上の四十雀リーグの中では最高年令で常にビリ争いをしていることから当然３部所属であり、平均年令が１０年若いチームを相手に今年も苦戦の連続ではあったが、０勝５分４敗の戦績で１０チーム中９位の成績はまずまずといえる。特に４０才代前半の若手を揃えた新規加入の岩崎中ＯＢと対戦して無失点に抑えた試合など、５回の引分試合では守備陣の健闘が称賛される。

現在のメンバー構成では四十雀リーグの中での対戦は年々苦しくなるばかりで、これからも四十雀リーグを続けるためには５０才になった若手メンバーの新規加入が望まれる。

古河マスターズ大会など５０才以上チームとの試合は８戦４勝２分２敗の戦績であり、なるべく同年配同士の試合機会を増やしたいと考えている。

五十雀リーグを目標に数年前から５０才以上チームの交流試合を提唱し、３年前から６チームが参加してはいるがなかなか軌道に乗らず、今年も公式には１試合実施されただけであった。１１月の四十雀リーグ代表者会議で、県協会事務局が来年度から五十雀リーグ発足をアナウンスしているので、ようやく本格的スタートとなりそうで期待している。

２．６０才以上の刈谷スーパーエイジ大会

参加資格６０才以上の第３回刈谷スーパーエイジ大会には、６０～６４才の湘南ペガサスシニアのメンバーと６５才以上の湘南ＯＢとの混成チームで今年も参加した。

第１戦には初参加の韓国釜山チームと対戦し、噂に聞いていた通りの強豪で０－５の完敗であったが、翌日の茨城とは引き分け、最終戦浜松との試合には勝って、総合成績は１勝１分１敗の五分で終わった。

３．付属・浦和・湘南の３高校ＯＢ交流会

旧制中学選抜蹴球大会（名門中）に替わって、付属、浦和、湘南の３高校のＯＢで６０才以上／５０才以上の各２チーム参加の交流試合が企画され、ＦＵＳサッカー交流会の名称で、第１回が１１月２３日に開催された。好天と芝生の良いグランドに恵まれ、戦績は６０才２勝、５０才１勝１分、合計３勝１分の快勝で、この好成績は上記のように湘南ペガサスシニアの四十雀リーグ加盟や６０才以上の刈谷大会参加により継続的にサッカーに親しんでいることの効果が現れたものと考えられる。また、早川純生（１８回）、早川次郎（２０回）、小林忠生（２３回）の早川３兄弟が揃って出場し、対浦和戦でそれぞれ得点を挙げられたのは特筆に値する活躍であった。

６０才以上が１９人も参加したのに対し、５０才代は８人しか集まらず、６０才以上から４人が５０才代試合にも重複出場した。参加資格が湘南ＯＢに限定されていることによる人数不足で、湘南ペガサスシニアチームがＯＢだけに限定しては成立しないことをあらためて痛感した次第である。

来年以降もグランド確保可能なら春秋年２回の開催が目標とされており、来年度は湘南ＯＢの新しいメンバーが参加されることを期待している。　　（昭和２７年　湘南高卒）

平成８年度ペガサスシニア試合結果（県40および50リーグを除く）

（1）神奈川県四十雀３部リーグ

９戦　０勝５分４敗　　１０チーム中９位

詳細は資料として収載

（2）第６回古河マスターズ大会５０才以上の部　　４戦　１勝１分２敗

６月１日　　湘南　１－０　東京五十雀

湘南　１－２　平成四十雀（栃木）

６月２日　　湘南　０－２　ヴェールソレ十和田

湘南　１－１　川口四十雀

（3）県スポレク五十雀

１０月２７日　　湘南　１－１　神奈川五十雀

（4）第３回刈谷スーパーエイジ大会　　３戦　１勝１分１敗

１０月５日　　湘南ＯＢ　０－５　韓国釜山

１０月６日　　湘南ＯＢ　１－１　茨城四十雀

湘南ＯＢ　２－０　浜松快童クラブ

（5）第１回ＦＵＳサッカー交流会　　４戦　３勝１分０敗

１１月２３日　　湘南５０　０－０　付属５０

湘南５０　４－２　浦和５０

湘南６０　１－０　付属６０

湘南６０　５－１　浦和６０　　（以上）

２．４　監　督　の　記

平成１０年シニアチーム監督　平成１１～１２年シニアチーム副監督

植　田　興　義

「心地よい疲労が何ともいえない」　いつまでもサッカーを続けたい――――――の文章で締め括って、平成１０年、監督一年目の１２月のＯＢ会報に活動報告してから、平成１２年までの３年間監督をさせて頂きました。その間まずまずの成績をおさめられたのはメンバーの皆様のご協力の賜と深く感謝申上げます。

しかし、まことに残念だった試合が一試合ありました。人数不足で棄権したことです。監督として一番悲しいことです。サッカーは１１人以上集まらないと試合になりません。

湘南ペガサスサッカー――クラブは、柳川さん、松本さん、大内さん、牧村さん達が中心になって立ち上げたと聞いています。その年代の人達だけで試合をして行くと段々きつくなります。働き盛りの四十代、五十代で常時試合に参加するということは非常に困難なことです。どうしてもメンバーを増やしたい。そのためには若い人に監督をやって欲しいということで、阿部さん、北原さんに監督をバトンタッチしました。

その後は若手の加入者が段々と増えて行き、最近では２０人近く参集することも多々あるようになり、監督としては贅沢な悩みを持つというおまけがつき、非常に喜ばしいことです。

いくら、サッカーをやっていれば楽しいといっても、試合に負けてばかりいてはつまりません。やはり勝ちたいと思うのが本音だと思います。

また年々６０雀のチームが増えています。そこでも湘南ペガサスは活躍しています。数年後には７０雀リーグも開催されることでしょう。

サッカーは健康なオジさんにとっては長いこと出来るスポーツです。各世代のメンバーがつながることにより、長い間他のします。「ノミニケーション」もチームが継続して行くうえで重要なファクターであると私は考えます。試合の反省、各人の性格、各人のサッカーに対する思い等々、いろいろコミュニケーションが図れます。メンバーの皆様に是非お勧めします。

湘南ペガサスサッカークラブは永遠に不滅です！！！

（昭和３６年　湘南高卒）

２．５ 監 督 の 記

平成１１年シニアチーム五十雀リーグ監督

山 本　豊

昨年のワールドカップは、私なりに大いに興奮もし、楽しませてもらいました。Ｊリーグ発足以降、日本でのサッカー熱も上方で固定、安定化したように思います。
今日のこのサッカーの興隆の基を築いたのは俺たちだという気持ちを、我々は一様に持っているのではないでしょうか。私なども、ささやかだけどサッカーの種まきもやった、という気持ちがいまだに抜けません。おまけに「この歳になって朝早くから、サッカー用具一式をかついで、いそいそと出かけているのです」という話をなかば得意になって、人様に吹聴したりして、まったく・・・・・・、というところです。

私に言はせれば、ペガサスシニアーの仲間は全員私以上のサッカー狂で、サッカーに関する知識全般は言うに及ばず、ワールドカップクラスの試合分析から戦術解説まで、更には選手個人の特性、能力にまでおよび、まさにサッカーに関しては免許皆伝、脱帽という面々と言えましょう。ただし、この知識、戦術と自分たちの試合とを照合すると、多少のズレがあるのですが、点が入って勝ち試合にでもなれば、これは全部実践できた、と皆思っているところが、わがチームの気分のよいところでしょう。

この流れが良い方向に出たのが、平成１１年度の五十雀チームで、この年の県下リーグで優勝しました。その翌年から優勝チームは県代表として、全国大会への出場権をもらえる、という発表があり、一同くやしい思いもしましたが、納会では気分のよい酒を楽しみました。たまたま私が監督を仰せつかっていた年でしたので、私にとっても納得の行くいい年でもありました。ただし、最終戦の頃グランドに集まった全員に試合に参加してもらうべく、試合開始直前まで選手交代のプランを練っていたため、準備体操無しで動いたのがたたり、開始早々左足首骨折、という騒ぎのあった年でもありました。

昨年あたりからは六十雀の試合が増え、嬉しいかぎりです。県内リーグ戦はもとより、全国規模の大会も充実しつつあり、六十雀の試合だけでスケジュール表が埋まるようになりました。歳を重ねても、同じ仲間とその歳なりのサッカーをいつまでも楽しめる、というのはすごい事ですね。いつまでも「日本のサッカーを支えているのは、俺たちだ、ペガサスシニアーを支えているのは、俺だ！」でいきましょう。

（昭和３２年　湘南高卒）

２．６　サッカーに魅せられ４０年

平成１２年シニアチーム五十雀リーグ監督　福 井 民 雄

湘南高校で始めたサッカー、大学から社会人３９歳まで続けたあと、４０歳と同時にペガサスに参加して１５年経った。ペガサスチームがあるおかげで、好きなサッカーを今でもプレーできることが幸せだ。

私のサッカー人生ちょうど４０年、よき思い出が沢山あり、サッカー仲間との絆は、何物にも替えがたい。
湘南高校時代は、鈴木中先生より基本技術から高度な戦術までご指導いただけたおかげで、関東大会優勝や全国選手権出場を経験してサッカーのおもしろさを知った。当時の仲間との付き合いがずっと続いており、鈴木先生を囲んでの集まりはいつも楽しい。
慶應大学サッカー部時代、関東大学リーグには釜本・森などの日本代表やユース代表が多数おり、自分の技量では通用する自信はなかったが、幸運にも１年のリーグ第１戦から起用され、４年まで全試合出場することができた。特に４年で主将として全日本大学選手権優勝の栄冠を手にし、大学チャンピオンになった時の感激は忘れられない。

昨年から関東大学サッカー連盟理事を務め、最近の大学サッカー界の様子を知る機会が増えた。大学サッカーはＪリーグ人気や高校サッカーの隆盛に比べてマイナーな存在になっているが、昨年１０月発表された川渕キャプテンズ・ミッションに沿った大学サッカー活性化策が次々と打ち出されており、今後大学サッカーがレベルアップし発展するのを期待したい。
最近の悔しい思い出として、昨年ペガサスが全国シニア大会出場を逃したのは残念で仕方ない。あの試合のペガ

サスはワールドカップの日本対トルコ戦の日本のようであった。相手を甘く見て、心は先の本大会に行ってしまい、集中力がないまま点を入れられて、試合が終わってしまった。あらためて試合に臨む気持ちの大事さを痛感した。

今年のペガサスは神奈川五十雀リーグ優勝だけでなく、全国大会に出場して日本一のペガサスになりたい。

(昭和４１年　湘南高卒)

２．７　監　督　の　記

平成１２年～１３年途中

シニアチーム四十雀リーグ監督　　阿　　部　　裕

一昨年(平成１３年　２００１年)の９月から２年間の予定でインドへ赴任となり、わずかの期間で監督を次の方に引き継いでいただきましたが、そのわずかな期間監督をやらせていただいて私が一番悩んだことは、やる以上は勝ちたいけれど、来た人全員に出場してもらえるようにすることも監督の務めだと言うことでした。

やはりどのレベルのチームにもその時のベストメンバーと言うものがあります。ただ私達の年代・レベルですと、相手チームに対する戦術の違いによってそれが変わるとかはあまりなくて、勝とうとすれば、どうしても動ける人、動けなくてもキープ出来る人、動けなくても人を上手く使える人が、優先となってしまいます。そこで相手が我々より明らかに弱い場合は、それほど悩まずに上記に該当しない人でも前後半に振り分けて起用出来ますが、それ以外の場合は、どうしてもまずは上記に該当する人優先の先発となり、その後の形勢・勝敗の行方をにらみながら全員を使って行くと言った形となります。その場合、我々のチームが試合を優位に進めていれば良いのですが、逆の場合は半分勝敗を諦めて交代させるか、どのポジションならば交代させても影響が少ないかを、試合の流れを冷静に見極めながら判断する必要が有ります。これを、時には試合開始直前まで参加メンバーが分からない、まして苦戦中の試合に自分も出場しているとなると、判断に必要な残り時間も正確には分からないしで、きっちりやるのは困難なことです。こんなことで、人数が足りないとチームとしては大変ですが、個人的には余計な心配をせずに思い切って試合が出来るのでホッとしたり、人数が多い時は、出たい気持ちをぐっと抑えてまず自分が外れることを考えたり、また試合開始前にウォーミングアップする余裕がなく、それが原因？で肉離れ等の怪我が増えたりもしたような気がします。でもいずれにしてもサッカーが出来ると言うことは本当に幸せなことです。

こちらでは、つい先日南アでのワールドカップでも準優勝しましたが、クリケットが盛んで、サッカーをやっているところ(ゴールも)はほとんど見かけないし、テレビで見るのと家の中で壁に向かってボールを蹴るくらい。唯一良い点は、元イギリス領だったこともあり、テレビでプレミア・リーグのいい試合はほとんど放映されており、特にアンリ、ピレス、ピエラ等フランス代表が５人もいるアーセナル、ベロン、ファンニステルローイと　勿論ベッカムもいるマンチェスター・ユナイテッドの、昔のイングランド・サッカーとちょっと違うサッカーを楽しんでいます。やはりこの２チームが他チームと違うのは、第３者の動きの質の高さと、そこに正確なパスを出せる選手の差と、これを基本としたパターンをいかに多く持っているかだとつくづく感じます。我々も頑張りましょう！

(昭和４２年　湘南高卒業)

２．８　湘南ペガサスチームと出逢って

平成１３年秋～現在

シニアチーム四十雀リーグ監督　　北　　原　　章

２５周年記念誌を発行するに当たって、歴代監督の回想という題名での寄稿依頼がありましたが、私としては現在監督任期途中のために回想と言えるような内容の文章が書けません。したがって、私が湘南ペガサスに入部したいきさつから現在のチーム状況について少々書かせて頂きます。

私が湘南ペガサスサッカークラブに入部させて頂いたのは、平成２年からであります。

私は、皆さんと違って湘南高校のOBではありませんので、当時私が勤めておりました会社のサッカー部の先輩に４０歳になったら四十雀チームに入りたい旨を相談したところ、湘南ペガサスを紹介されそのまま入部すること

になりました。

ペガサス入部当時はまだ神奈川県リーグ〈２部〉で現役を続けておりましたので、四十雀のチームならば比較的楽な試合ができるのではないかと多寡をくくっておりましたが、パワフルであったことが印象に残っております。
ペガサス入部当時は、現在のジュニアチームで県の一部リーグでやらせていただきました。ジュニアチームでは３位が最高の順位で、平成１０年までの間に優勝できなかったことがやや心残りでありましたが、年齢には勝てず平成１１年のシーズンよりシニアチームへ移籍することになりました。

シニアチームでは、移籍した最初の年および昨年と五十雀リーグで２度の優勝を経験させていただき、さらには全国シニア大会の神奈川県予選を勝ち抜き、関東大会まで行けたことについて、非常に感謝しております。今後もさらに優勝回数を増やし、全国大会本大会を目指して、まだまだがんばるつもりであります。

さて監督としての回想ですが、前述しましたとおり現在まだ任期途中であるため回想といえるものはありませんが、そもそも私が監督になったいきさつについて若干述べさせて頂きます。
私が監督となったのは、平成１３年のシーズンの途中であります。それまで監督であった阿部氏が会社の命令で海外勤務となり、そこで阿部氏が帰国するまでの間、監督を任されることになりました。
監督としての仕事は、試合のメンバーを決めることが主ですが、これがまた大変な仕事です。なぜならば、試合毎に来るメンバーの数が大きく変動することです。とくに２０名以上来られると全員出場してもらうためにどのように交代して行くか、試合どころではありません。またそれとは逆に人数がぎりぎりのときもあり、そのような時はみんなバテバテでも交代するメンバーがいないためかなり苦しい試合をしたことも、特に、前日〈土曜日〉に五十雀の試合があると極端にメンバーが少なくなりました。
チームの状況としては、昨年（平成１４年）は、メンバーの皆さんのガンバリによって３部リーグではありますが、なぜか４勝（２グループ化で８試合　１分３敗　相手は４０代）もできました。当初はせいぜい２勝程度が良いところであろうと思っておりましたが、やはり試合となると負けたくないと言う闘争本能のようなものが目覚めてか、実力以上の結果となった感じが致しました。しかし所詮は五十雀のメンバーでやっているため、対戦相手との平均年齢差が１０歳以上あり、この差は大きく今後も同様の結果を得ることは困難であろうと思われます。従って今年（平成１５年）昨年ほど勝つことはできないでしょうが、それでも最低で２～３勝はしたいと思います。

今後については、現在の四十雀リーグにいつまで参加できるのか不明な点がありますが、従来同様全員参加の楽しいサッカーの試合をやって行きたいと思います。但し、試合後のビールがうまく飲めるようある程度満足の行く試合（勝てそうな相手には絶対に勝つ）をしてゆきたいと考えております。
最後に、湘南ペガサスサッカークラブのさらなる繁栄とメンバー皆様のますますの発展とご健勝を祈念して、結びとさせて頂きます。　（昭和４０年　県立川崎工高卒）

２．９　シニアチームの現在監督として

平成１４年～現在

シニアチーム五十雀リーグ監督　牧　村　英　樹

ペガサスが発足して２５年を迎え、記念すべきこの年にシニアチームの監督として在籍していること、クラブ発足時に関わった一人として感無量の思いです。２５年という歳月はいつのまに発足当時３５歳だった私も今年は６０歳！隔世の感の思いです。一方では、ペガサスを発足時から今日のクラブにまで育て上げるのに、大変ご苦労下さった功労者のお一人である大内さんが志半ばで亡くなられ、この２５年の記念すべき節目にご一緒でき得ていない事はとても残念であります。

「ジュニア」から「シニア」チームへ、「シニア」から「６０代」チームへと年齢の積み重ねに合わせ、スムースに
移行しながらサッカーを続けて行くことの出来る態勢がクラブの中に醸成され、今思えば本当にペガサスというクラブが創られてよかったなぁ～と感じています。身体が動く限りサッカーと触れ合え楽しめる場が確保でき、肉体の衰えという現実と常にそれを認めたくないという気持ちとの葛藤の中、しっかりと現実を自覚させてくれるこのペガサスでの活動は他では得られない大事な場だと思います。ペガサス６０のチームを形作って頂いた中原さんに

は特に感謝申し上げるところです。いずれにしても、２５年の長い歳月の中で節目節目でクラブの存続・発展の為にご活躍下さった皆様のご努力の結晶が無事今日を迎える事が出来た最大の理由である事は周知の通りでありましょう。

さて、平成１４年度から監督をさせて頂き２年度目を迎えたところであります。なんと言っても昨年は「県シニア郡
市リーグ」を負け無しで優勝することができ、最終戦終了後、みんなで勝利の雄叫びを挙げた後の胴上げは監督冥利に
につきるものでした。選手の起用法に不満のある人が胴上げの途中で手を離すんじゃないかと心配もしましたが、無事
着地させてもらった時には、そんなにうらまれてもいなかったのかと一安心したものでした。
更にペガサスシニアとして、その歴史に記されるべきと言うと多少オーバーかとは思いますが、「第一回全国シニアサッカー大会」に選抜チームを破っての初代神奈川県代表として関東大会に出場した事は特筆すべき事だと思います。Wカップ時カメルーンが合宿し使用したすばらしい芝のグランド、前の晩学生時代を思い起こすような焼肉屋での盛り上がり、そして茨城県代表に勝ち、残念ながら千葉代表に負け今一歩で全国大会に行けなかったものの、これら悲喜こもごもの思い出は参加した一人一人にとって一生忘れ得ぬものとなった事でしょう。この結果、私達のクラブチームはいよいよその活躍の場を県外にまで広げる事になったと言えます。

さて、このように１４年度みんなでがんばった結果、今年１５年度は追われる立場となり厳しい戦いが予想されます。年末の総会時に気持ち良く後任者に監督を引き継げるようみんなの力を借りて前年同様の成績を上げ記念すべき２５年の節目の年を飾るべくがんばりたいと思います。

（昭和３７年　湘南高卒）

3. 湘 南 ペ ガ サ ス 60

3．1　平成１２～１３年度の活動

ペガサス６０監督　中　原　弘　巳

旧制中学選抜大会その他を通して、古くから湘南 OB の方々が 60 歳を超えてもサッカーのプレイをされて来られました。刈谷の大会は平成６年の第１回から、J ヴィレッジは平成１０年のプレ大会から続けて参加しています。湘南先輩のこのような活動が、今や高年齢層のサッカーとして一般に広まっています。ペガサスシニアの 60 歳以上のメンバーもこの湘南 OB チームに加わって刈谷や J ヴィレッジの大会に参加して来ました。平成 12 年からはチームはペガサス主体となり、川島先輩のペガサス加入も得て、湘南ＯＢチームの歴史と実績をペガサス６０が引き継いでいます。平成 13 年度はさらに菅平の大会に参加しました。従来６０歳以上のメンバーはペガサスシニア「４０」あるいは「５０」の試合に加わりながら、「６０」の試合をときたま行うかたちでしたが、平成１３年度は「６０」の試合が増加し、ペガサス６０活動を附属的なものから、独立したものへと拡大しようとした年でした。
このような 60 代サッカーの発展に、湘南ＯＢからペガサスへと、湘南チームは最初から参画して来たわけですが、中学/高校ＯＢ主体のチームは他に見られないユニークなものです。
さらに、平成１３年には初めての海外遠征をペガサスの「50」＋「60」主体で行いました。

（1）平成 12 年度の活動
J ヴィレッジの大会が平成１２年度から日本サッカー協会が主催する全国シニア(６０歳以上)大会に発展しました。札幌から熊本までの日本全国から２２チームが参加しました。やや窮屈な面もありますが、整備された芝生のピッチの上できっちりした試合の運営の中、緊張感のあるゲームを楽しむことが出来ました。３日間で５試合の強行日程でしたが、２２名のフルメンバーの参加で、負けなしの好成績でした。初日から参加した方々の緒戦での頑張りがチームの勢いを作り、最終戦で強豪埼玉県を見事に破りました。
９月開催の刈谷スーパーエイジ大会は形式にとらわれない自由にサッカーを楽しむ大会として、平成１２年度で第７回と実績を重ねて来ました。３戦全勝でしたが、特に関学中央には動きの早さで圧倒し完勝しました。
６０歳以上のねんりんぴっく大会が大阪で行われましたが、酒井さんが纏められた神奈川県選抜チームに多くのペガサスメンバーが参加しています。

（2）平成１３年度全国大会

毎年参加のＪヴィレッジ全国シニア(60歳以上)大会（5月）、刈谷スーパーエイジ大会(11月)に加えて、菅平ダイヤモンドエイジ大会(6月)に参加しました。いずれも良好な芝生のグランド、周囲の素晴らしい環境でのサッカーを楽しみました。7勝4敗1分けの戦績でした。

（3）平成１３年海外遠征

湘南ペガサスとしては初めての試みですが、６０代を中心とし５０代の参加も得て、海外遠征を行いました(８月３０日～９月７日)。行き先はオーストラリア・ゴールドコーストです。ここにはオーバー３５のサッカーリーグ連盟があり、良い気候の下で年間を通して試合をしています。このリーグから５０、６０代の選手を選出して作った2チームと対戦しました。 聞いてみると、いずれもかって若い時に欧州で活躍していた人たちで、流石に強く、完敗でした。しかし、グランド脇での名物のバーベキューとともに、本場のサッカーらしいものを楽しむことが出来ました。彼らは芝生の専用グランドで毎週 1～2 回のナイトゲームを、休日を使うことなく、仕事が終わってから行っており、サッカーが日常生活の中に組み込まれているようでした。日本代表チームの成長とは別に、一般レベルでのサッカー環境の違いを改めて感じました。

（4）平成１３年　県内の試合

県内の60歳代チームとの交流練習試合を3回行いました。

(昭和３０年　湘南高卒)

３．２　平成１４年度の活動

ペガサス６０監督　中　原　弘　巳

敬老の日の前日にテレビ東京の全国ネットで「湘南ペガサス６０」の試合振りが紹介され,塩川さんの見事なロングシュートが映し出されました。番組のコメンテイターは予想外の動きの早いサッカーに感心していました。最近の元気なお年寄りの活動の一つとしての紹介ですが、年配者のサッカーが生涯スポーツとして盛んになって来ていることが認められ、その代表例としてペガサス６０チームに声が掛かったものと思います。

６０代の大会が最近は増加しており、この年代の試合のみでも年間を通してサッカーが楽しめるようになって来ています。特に県外での試合が多く、各地の新しいチームと対戦出来る楽しみがあります。多くの試合が芝生のピッチで行われることも嬉しいことです。県内では今年から試験的に4チームで六十雀リーグを始めています。5勝ち1分けでした。県外では古河の大会に新しく六十雀部門が設けられ、3チームの参加でしたがペガサスが優勝しました。感動&健康リーグ（Gリーグ）に今年から参加しています。これは勝敗よりも健康増進と交流を深めるためのもので、関東と清水の8チームで各地で交流会を行っています。7月にはワールドカップ公式練習場用に使用した素晴らしい芝生の保土ケ谷サッカー場に東京、清水を迎えました。皆さんワールドカップの興奮を思い出しながらのプレイだったと思います。従来からの、全国シニア(Jヴィレッジ)、菅平、刈谷の大会には引き続き参加しました。

戦績を纏めると17勝11敗4分けの合計32試合でした。

第１５回全国健康福祉祭ふくしま大会（うつくしまねんりんピック２００２）にペガサス中心のメンバーで参加しました。ねんりんピックのチームは県協会が選抜しますが、ペガサスの実績によりペガサス主体のチーム作りが可能になっています。

今年平成１５年４月に桑田先輩に誘われて何人かの湘南OBの方々とSOI英国遠征に参加しました。その時の対戦相手プラット氏は、かってオックスフォード/ケンブリッジ合同チームの一員として、ウェンブレイ１０万観衆の前でＦＡアマチュア選手権に優勝したそうです。その名門チームの名前が「ペガサス」だったとのこと。日本のブラザー　ペガサスの存在を喜んでくれました。ペガサスはサッカーチームとしてなかなか由緒ある名前ということになります。ご紹介まで。

(昭和３０年　湘南高卒)

編者注：ゲームの結果は戦績として巻末「資料」に収録してあります

湘南ペガサスシニアチームの渉外担当として

シニアチーム　山　本　　修

１５周年記念誌と一部重複しますが、シニアチーム発足以降の経過概要を、渉外担当の立場から回想して寄稿とします。

１．湘南ペガサスシニアチーム発足

湘南ペガサスクラブ設立後１０年以上経過すると、発足当時のメンバーの多くが５０才以上となり、毎年４０才の新人が加入して四十雀リーグ１部の公式戦に出場するのは４０才代の若手メンバーが中心となり、５０才以上のシニアメンバーは年数回の親善交流試合に参加するだけという状況になってきた。

１２年目の平成元年（１９８９）からは、横浜サッカー協会主催のマスターズＯＢ大会に参加し、年に１回ではあるが、５０才以上のメンバーでの試合機会が確保されるようになった。

１４年目の平成３年（１９９１）年度には、クラブ内の世代交代も十分に進んだことから、発足当時の年代層の湘南ＯＢおよびその友人の協力参加も加えて、５０才以上メンバーの湘南ペガサスシニアチームが編成され、四十雀リーグ１部所属の湘南ペガサスチームから分離独立して、この年の第８回四十雀リーグの２部に加盟した。

この年度に、私は新編成の湘南ペガサスシニアチームの渉外を担当した。

２．四十雀リーグ２部・３部

シニアチームが加入した平成３年度第８回の四十雀リーグは１部・２部各11チームの構成であったが、新規参加チームが年々増えて、平成７年度第１２回は１部１３チーム・２部１４チームの計２７チーム、平成８年度（１９９６）第１３回には３０チームになって、１部・２部・３部各１０チームの３部制に再編成され、それ以来湘南ペガサスシニアは３部に所属している。

参加資格４０才以上の四十雀リーグの中では、５０才以上の我が湘南ペガサスシニアチームは高年令で、平均年令が１０年若いチームを相手に常に苦戦の連続で、２部でも３部になっても、毎年ビリ争いをしている。神奈川四十雀Ａチームと初期の川崎四十雀Ａチームとは、湘南ペガサスシニアチームと同様に、５０才以上で構成されているので、同年配で対戦できる数少ない相手であった。

１０年ほど前までは、子供サッカークラブの手伝いをしている父親たちが主体のチームが、四十雀リーグのなかに２～３チームは所属していた。子供クラブの世話をしながら、我々もやろうといって中年でサッカーを始めたメンバーが多数のこのような父親主体チームに対し、湘南ペガサスシニアチームは、４０才代の走力とスピードには負けていても、球扱いの技量と戦術眼の優位性を生かして対抗し、勝負は互角の好敵手であった。これらの父親主体チームも世代交代が進むと、走力と技術を兼ね備えた強力チームに成長して、以前のような好敵手は少なくなってしまったようである。

５０才以上の湘南ペガサスシニアが、同年配の対戦相手が少ない時代に、やむを得ず四十雀リーグ２部・３部に加入したもので、五十雀リーグが本格的に運営されるようになると、四十雀リーグからは撤退することも議論されるようになったが、とりあえず、平成１５年度第２０回四十雀リーグにはこれまで通り参加することになっている。

３．五十雀リーグ

四十雀リーグ所属のどのチームも、湘南ペガサスクラブと同様に、四十雀リーグ発足当時のメンバーの多くが５０才以上となり、試合出場機会が少くなっている状況から、五十雀リーグを目標に、５０才以上チームの交流試合を各チームに呼びかけ、平成４年度（１９９２）には当クラブの井上孝氏が世話役になって、東海大学グランドを借りて５チーム参加のワンデイ五十雀交流試合を開催し、平成５年度、平成６年度は６チーム参加で五十雀プレリーグが実施され、湘南ペガサスシニアチームも参加した。

平成７年度、８年度はこの活動がスローダウンしていたが、ようやく準備が進んで平成８年11月の四十雀リーグ代表者会議において県協会事務局から五十雀リーグの来年度発足がアナウンスされ、湘南ペガサスシニアを含む８チームの参加により、平成９年度（１９９７）第１回五十雀リーグがスタートした。その後加入チームが増加して、平成１４年度（２００２）第６回五十雀リーグには12チーム、今年平成１５年度第７回には14チーム

が参加している。
同年配と対戦する五十雀リーグでは、湘南ペガサスシニアは毎年優勝争いに加わっており、平成１１年度第３回と１４年度第６回の２回の優勝、準優勝１回、３位３回の成績である。

４．湘南ペガサスシニアチームのその他の試合

（1）県議長杯五十雀トーナメント

四十雀リーグと並んで四十雀トーナメントは以前から開催されているが、五十雀リーグの参加チーム増加に対応して、県議長杯五十雀トーナメントが平成１３年度第１回、１４年度第２回と開催され、湘南ペガサスシニアチームもこれに参加している。

（2）古河市マスターズ大会５０才以上エンジョイ部門

古河市マスターズ大会は４０才以上を参加資格に平成３年度（１９９１）から実施されているが、平成７年度の第５回に５０才以上エンジョイ部門が新設された機会に、なるべく同年配同士の試合機会を増やしたいと考えて、湘南ペガサスシニアも参加し、以後毎年１泊２日の交流試合を楽しんでいる。

（3）全国シニア大会

平成１４年度第１回の全国シニア大会が、日本サッカー協会主催、５０才以上が参加資格で、県別予選、地域別予選の後、全国大会という方式で開催された。湘南ペガサスシニアは、神奈川県予選で五十雀リーグ選抜チームに勝って関東大会に出場し、１回戦茨城代表に勝ったが、代表決定戦で千葉代表に敗退し、全国大会には出場できなかった。

５．６０才以上の「湘南ペガサス６０」チーム

湘南ペガサスクラブ設立後２０年以上経過すると、発足当時のメンバーの多くが６０才以上となり、ペガサスシニアチームに毎年５０才の新人が加入して、五十雀リーグの公式戦に出場するのは５０才代の若手が中心となり、６０才以上のメンバーは、別途以下のような６０才以上の試合に主として参加するようになった。
このような試合行事はクラブ運営とは別扱いとして運営されていたが、ペガサスシニアの６０才以上メンバーの増加に対応して、６０才以上対象のこれらの試合をクラブの行事として認定することとなり、平成１２年度（２０００）から６０才以上メンバーの湘南ペガサス６０チームの活動が開始されることとなった。
これにより、我が湘南ペガサスクラブには、４０才以上、５０才以上、６０才以上の各年代別チームが編成され、それぞれ年代に応じて活動できる体制が整備された。

（1）刈谷スーパーエイジ大会

参加資格６０才以上の刈谷スーパーエイジ大会には、湘南サッカー部超ＯＢと６０才以上の湘南ペガサスシニアのメンバーとの混成チームを編成して、湘南ＯＢサッカークラブの名称で、平成６年度（１９９４）第１回から参加した。
ペガサスシニアのメンバーが、毎年６０才となるとこのチームに加入して、年々増加し、平成１０年度の第５回から実質的にペガサスシニアの６０才以上メンバーで構成されるようになり、平成１２年度第７回からは、上記ペガサス６０チームの公認に対応して、湘南ペガサスクラブの名称で参加している。

（2）福島Ｊビレッジの全国シニア大会

福島Ｊビレッジを会場に、参加資格６０才以上の全国シニア大会が企画され、平成１０年度（１９９８）プレ大会、１１年度第１回から公式にサッカー協会主催により開催されるようになった。上記の刈谷と同様に、湘南ＯＢクラブ･湘南ペガサスクラブとして、平成１０年度プレ大会から１４年度第４回まで毎年参加している。

（3）菅平ダイヤモンドエイジ大会

菅平高原の旅館組合が、ラグビー用に整備した芝生のグランドを提供して、参加資格６０才以上のサッカー交流会を開催している大会で、平成１３年度（２００１）第１回、１４年度第２回と、湘南ペガサス６０チームが参加した。

（4）六十雀リーグ

神奈川県四十雀リーグが間もなく２０周年を迎えることから、参加資格６０才以上の六十雀リーグの準備が進められ、平成１４年度（２００２）プレリーグとして、湘南ペガサス６０を含む４チーム参加、２回総当たりのリーグ戦が実施された。

平成１５年度には、５チーム参加の第１回六十雀リーグがスタートの予定である。

（5）古河マスターズ大会６０才以上エンジョイ部門

平成１４年度（２００２）第１２回の古河マスターズ大会に、６０才以上エンジョイ部門が新設され、湘南ペガサス６０チームが出場し、３チーム参加の第１回大会に２勝して優勝した。

（6）Ｇリーグ

東京、千葉、茨城、埼玉、栃木、神奈川、などの関東各県と清水市の６０才以上チームが集まって、良いグランドが確保できた機会に、お互いに誘い合ってサッカーを楽しむ交流会が、感動と健康のＧリーグと称して、02年度から開催されるようになった。

湘南ペガサス６０は、昨　平成１４年度には、千葉県都賀、習志野、埼玉県深谷、清水へビジターとして参加したほか、昨年７月には、湘南ペガサス６０が主催して、ワールドカップの公式練習会場として芝生が整備された保土ヶ谷サッカー場を会場に、東京と清水を招待した。

6．東海大四之宮グランド

神奈川県のシニア年令リーグは、昨　平成１４年度第１９回四十雀リーグ；１部・２部・３部Ａ・３部Ｂの編成で計４３チーム、第6回五十雀リーグ；１２チームが参加する盛況で、更に年々増加している。

この四十雀リーグ・五十雀リーグ実施の最大の問題点は試合会場のグランド確保である。

このためには、参加チームが年に１回グランドを確保することが原則で、このグランドの順次持ち回りにより一日５～6試合を消化して１０～１２チームの総当たりリーグ戦が成立する。年々増加する新規加入チームには、この原則が厳しく適用されて、年１回のグランド確保が新規加入の資格要件とされている。

我が湘南ペガサスは、ジュニアチーム・シニアチームの２チームが参加しながら、ホームグランドとして確保提供できるグランドが無いので、グランド確保は他チームに依存している。四十雀リーグスタート以来の古参メンバーとして大目に見てもらっているが、いつも肩身の狭い思いを続けてきた。

平成４年度（１９９２）第9回四十雀リーグから、井上孝氏の紹介で、東海大学四之宮グランドが借りられるようになり、平成１０年度第１５回四十雀リーグまでの７年間は湘南ペガサスの提供グランドとして使わせてもらった。相模川河川敷のこのグランドは、雑草が生えていて、必ずしも良いグランドとは言えないが、この期間は、通常の割り当て以上に多くの回数のグランドを提供して、長年の借りを返すことができた。

残念ながら、平成１１年にこのグランドは閉鎖になり、我が湘南ペガサスはグランドを提供できないチームに逆戻りしている。

7．リーグ幹事

平成７年度（１９９５）には、湘南ペガサスシニアチームの渉外担当を、私が再度引き受けることになった。この年は、第１２回四十雀リーグの２部の持ち回り当番の年に当たり、湘南ペガサスシニアチームが主幹事、座間四十雀チームが副幹事として、リーグ運営の大役を受け持つこととなった。年間の仕事量も多いことから、この年は、渉外主担当の私と副担当の井上孝氏との２人でこの仕事を担当した。

この年も新加入２チームが増えて、四十雀リーグ２部は１４チームの編成となった。前年の２部１２チーム総当たりのリーグ戦でも、１日６試合×11日＝計６６試合が必要で、グランド確保の困難や、更に雨天順延などが起きて、毎年幹事チームは１１月ないし１２月までに日程を完了させるのに苦労していた。

１４チームの総当たりリーグ戦では９１試合の日程消化が必要で、例年通りのやり方では、４月開始、11月完了の目標の達成はまず不可能と予想された。そこで、リーグ戦による順位決定の基本線は維持しながら年間試合数を削減できるように、つぎのような２段階リーグ戦方式を創案した。

２段階リーグ戦方式　　計６７試合

第１次リーグ　Ａブロック　Ｂブロック　各７チーム独立にリーグ戦　　４２試合

第２次リーグ　上位リーグ　上位各４チーム計８チームのリーグ戦　　１６試合

下位リーグ　下位各３チーム計６チームのリーグ戦　　９試合

（１次リーグで対戦した試合は再戦せず、１次リーグの結果を適用）

これにより、リーグ戦として１位から１４位までの順位は決定されながら、総当たりに比べて２４試合が削減され、前年の１２チーム総当たりの試合数６６試合と同程度になる。しかも、上位同士･下位同士の対戦試合は確保され、削減されるのは上位対下位の対戦であり、リーグ戦として望ましい特徴が維持されて、実害は少ないと期待される。

共同幹事の座間四十雀チームとも相談して、リーグ戦開幕準備の四十雀リーグ運営委員会に対し、この２段階リーグ戦方式を提案した。ところが、リーグ運営委員の主要メンバーからは、例年通りの総当たりリーグ戦で実施すべきであると、反対意見が出され、この案はボツになりそうになった。

運営委員の一人から、「まずこの２段階リーグ戦方式でスタートし、第２次リーグが終わった時点で、日程に余裕があれば総当たりの残り試合を実施し、日程に余裕が無ければそこで打ち切りとすれば良い」との助け船が出され、この妥協案が採用された。

実施結果は予想通りの苦しい日程であり、第２次リーグが１２月までズレ込んで、第２次リーグ終了をもって打ち切り、結果として２段階リーグ戦方式の実施となった。

リーグ運営の幹事チームとして一番の懸念事項は、例年通りグランド確保であったが、上記６項の東海大四之宮グランドを使用させてもらえたことで、大いに助けられた。

８．渉外担当として

湘南ペガサスシニアより５年早く、神奈川四十雀クラブでは５０歳以上の神奈川四十雀Ａチームを編成して、昭和６１年度（１９８６）第３回四十雀リーグから２部に加入していた。

私の場合、前年昭和６０年度第２回四十雀リーグまでは湘南ペガサスのメンバーとして出場したが、翌年の第３回四十雀リーグから選手登録を２部新加入の神奈川四十雀Ａチームへ移籍し、平成２年度（１９９０）第７回四十雀リーグまで５年間、神奈川四十雀Ａチームでは監督兼渉外担当兼選手として出場した。

５０歳以上メンバーにより湘南ペガサスシニアチームが新編成されて、平成３年度第８回四十雀リーグの２部に加入した機会に、私も選手登録を移して湘南ペガサスシニアに復帰した。神奈川四十雀Ａで渉外を担当していた経験が買われて、この平成３年度に、湘南ペガサスシニアの渉外を、私が担当することになった。

次の年も渉外担当を継続のつもりであったが、たまたま家内が脳腫瘍で手術、長期入院ということになり、平成４年度の渉外担当を井上孝氏に引き継いでもらった。

家内の脳腫瘍手術後の経過不良、１年１０ヶ月の長期入院の後亡くなるまで病院通いに忙しく、足掛け３年間はクラブの役職を免除させてもらったが、平成７年度（１９９５）には、湘南ペガサスシニアチームの渉外担当を、私が再度引き受けることになった。この年度は、前記７項のように、第１２回四十雀リーグ２部１４チームのリーグ幹事の大役のほか、古河マスターズ５０才以上の部に初参加した年であった。

湘南ペガサスシニアの渉外担当に加えて、リーグ運営委員にもアサインされ、四十雀リーグ全体の企画運営の審議に参画した。翌年平成８年度は第１３回四十雀リーグの３部制への再編成の年、次の９年度は第１４回四十雀リーグ３部と並行して第１回五十雀リーグ開始の年で、平成７年度～９年度の多事多難の３年間、クラブの渉外担当とリーグ運営委員を続けた。平成８年度（１９９６）には湘南ペガサスシニアチームの監督も兼任した。

平成１０年度は、痴呆症の老母の介護のため１年１０ヶ月の予定で母の住居の世田谷区へ転居し、夜間･休日の外出の自由度が制約される事態となり、やむを得ず渉外担当を辞退して、渉外担当とリーグ運営委員を渡嶋九州夫氏に引き継いでもらった。

９．おわりに

今回の２５周年記念誌は、前回の１５周年記念誌から後の１０年間が対象であるが、シニアチーム発足以降の１２年間の経過概要を回想して、寄稿としました。

この時期は、私にとっては、家内の入院手術以来の約１１年間一人暮らしを続けた時期と重なります。
一人暮らしによるストレスに加えて、家内の看病から死亡の後処理、ボケの老母の介護分担が重なって、ストレスの多い１１年でした。これまで何とか健康で過ごすことが出来たのは、皆さんと一緒にサッカーをやることができ、皆さんから励ましていただいたお蔭と感謝しています。

シニア年令のサッカーが益々盛んになって、県内では四十雀リーグ･五十雀リーグ･六十雀リーグと年代別の試合機会も増え、我が湘南ペガサスクラブも４０才以上、５０才以上、６０才以上の年代別チーム編成が整備されていますが、私の場合、

四十雀リーグ発足第１回の　昭和５９年（１９８４）、　私は５１才、
五十雀リーグ発足第１回の　平成9年（１９９７）、　私は６４才、
六十雀リーグ発足第１回今年平成１５年（２００３）、　私は７０才　　という経過で、

どの時代も少し早く年を取りすぎて、２０年間若い選手相手に苦戦を続けてきました。
１０年後には、七十雀リーグ発足を８０才で迎えることを目標に、これからも励みたいと願っています。

（昭和２７年　湘南高卒業）

シニアリーグとの関わり

（審判活動を通して見たシニアサッカー）

シニアチーム　渡　嶋　九　洲　夫

だいぶ古い話からになるが、シニアリーグとの関わりの前に、私とサッカーとの出会いから紹介しましょう。
昭和２４年（１９４９年）鎌倉第２小学校６年生のときのこと、鎌倉師範（現横浜国大）から教生としてこられた一人の実習生と出会いサッカーを教えて貰ったのが、私のサッカー人生の始まりである。以来５４年間サッカーと付き合っている。

鎌倉学園中学校時代は、ペガサスシニアの伊藤貞夫氏と県大会等で一緒にプレーしてきました。その後、湘南高校を卒業した後、フェニックスというチーム（卒業同期の１１人プラス何人かの湘南卒業生で編成したチーム）でプレーし、昭和３７年（１９６２）（株）山武（当時は山武計器㈱）に入社、２年後にサッカー部を作って、プレーする傍ら、審判を同時にやってきました。山武における現役を卒業し、ペガサスに入団を申請したところ、故人の大内氏から、これまた故人の松浦大先輩から藤沢四十雀から指名があったということで藤沢四十雀に参加することになりました。ペガサスに移籍したのはそれほど昔ではない。

審判活動としては、鎌倉学園の先輩手塚健一氏（後の国際審判員）の指導を受け２級審判になることが出来、山武のチームが関東リーグに所属していた頃は専ら審判員として、関東大学リーグ・旧日本リーグ・関東社会人サッカーリーグの審判員に専念してきました。

審判で一番大切なことは競技規則を正しく適用することでありますが、１～１７条ある競技規則の他にもう一つ『１８条』を適用することが重要、かつ大切と教えられ、自分でもそのとおり実行しています。
このことを念頭に、一般常識（コモンセンス）に属する部分を、そしてシニアリーグでは特に、選手の体力の衰え、反射神経の後退を考慮して、判定を前倒しにするように心がけています。

ある年度末の納会で、シニアリーグのある人から、この人（私のこと）は神奈川シニアリーグでもっとも厳しい審判だといういうことを酔った席で指摘されたことがあります。しかし選手皆さんの体力・身体能力を考えたとき私は間違っていないと確信しています。
会員諸氏のプレーにおいて、この辺りについての理解と自覚が深まる事を期待しています。

（長くシニアチーム渉外を担当　審判員としても奉仕　昭和３０年　湘南高卒業）

【筆　者　注】
１８条について：
１～１７条を、試合の中で適用するにあたって、選手の年齢層に見合った適用の仕方をすることが大切です。
小学生・中学生のチームに対しては教育的な立場での適用の仕方、高校生以上シニアになる前の一般チームの試

合に対しては厳正（激しいプレーと汚いプレーを見極めて）速い展開のあるゲームに対応すること、シニア以上のチームのときはケガの直りが遅くなることと、体力の衰えと反射神経の後退を考慮してレイトタックルの防止やショルダーチャージなどの程度を考慮した対応が必要です。

判定の前倒しについて：

シニアの試合では、１８条の項でも触れたとおり、体力の衰えと反射神経の後退によって、その選手が意図していないであろう反則が目立つようになります。試合開始の早い段階で、そんなプレーをすると反則として『笛を吹くよ』ということを、選手に理解してもらう必要があります。軽い反則であったとしても、若いときはアドバンテージを採用してプレーを続行させた方が良いケースでも、シニアの試合では、反則を受けた選手の体力を考慮して、他のカテゴリー以上に厳しく競技規則を適用することが大切と考えて実行しています。

この目的は、少しでも長く選手生活を続けて欲しいからです。

以上

随　想

1．雨の日の思い出

シニアチーム　伊　通　　元　康

現在加盟をしている四十雀および五十雀リーグでは、基本的に雨天での試合は行わないことになっている。ぼくは中学、高校生のころの雨の日の試合を懐かしく思い出すときがある。

初めての雨降りでの試合は、昭和３７年（１９６２）６月の練習試合であった。そのとき、ぼくは長後中学の三年生で、サッカー部の初代のキャプテンでもあった。創部２ヶ月余りで、まだサイドキックもろくにできない、ただ走り回るだけの少年の集まりであった。

対戦相手は大和の光ヶ丘中学で、同校のグランドでの試合となった。開始後まもなく雨が降り始めて、前半が終了するころにはドシャ降り状態であった。たしか先制点を取られていたと記憶をしているが、ぼくはそのうち、身体全体が濡れることがこんなに楽しいものなのか、という思いで戦っていた。雨雫が頬をつたわり口もとに達すると、雨独特の埃のような味がしたことを思い出す。　当時のシャツやパンツは、今どきの発汗性のよいハイテクの生地ではなくて、木綿地のものであった。ハーフタイムでの円陣では、誰もが雨と汗を十分吸い込んでだらしなく弛んだシャツ姿で、嬉しそうに話し合っていた。あのときがぼくのサッカーの原点であったような気がする。ただ無邪気にひたすら走ってボールを追い掛け回していたころが。

試合結果は、ぼくが新設チームとして初の得点をあげたが負けてしまった。

昭和４０年（1965）７月の水戸における関東大会の１回戦が大雨での試合となった。対戦相手は東京の大泉学園高校であった。ぼくは３年生で、ポジションはストッパーであった。最初から負ける相手とは思っていなかったが、グランドコンディションが最悪のなかで、攻めに攻めているが点が入らず、嫌な雰囲気が漂ってきた。そのようなとき、後半であったと思うが、相手に強いシュートを打たれた。ヤバイ！と目をつむりかけた瞬間に、ワンバウンドしたボールがゴール前で急にストップをして事なきを得たことがあった。試合はそのまま０：０で終了して、周知のとおりぼくらは抽選勝ちを収めた。あのとき泥だらけの顔から白い歯をのぞかせて、みんながほっとしたように中さんと握手をしまくっていたことを思い出す。

この大会で湘南高校は、決勝戦を帝京高校と戦い１：０で勝利した。

（昭和４１年　湘南高卒）

2．私とサッカーの出会い

ペガサス「６０」チーム　伊　藤　貞　夫

昭和２４年（'４９）４月、私は鎌倉学園鎌倉中学校に入学しました。私達の小学校時代は、スポーツと言えば野球しかなく、毎日草野球をしていました。当時は道具と云えるものはなく、ボールは布切れを巻いて作り、バットは木を削って作ったもの、グローブは布で作ったもの、今から見たらよくこんなもので野球が出来たと思われる、ひどいものでした。それでもみな野球を一生懸命やっていました。私も同じ、自分も上手いつもりでいたので、中学に入ったら野球部に入ろうと思っていたのですが、入部テストがあり、みな素晴らしい皮のグローブを持って、テストの順番を待っていました。私は親がどうしても買ってくれません。仕方なくテストを見学していました。

そんな私の様子を見て近付いてきた上級生がいました。高校三年の私の兄の友人で、今ペガサス「６０」の栗原克夫さんの兄さんです。「半袖シャツと半ズボンが有れば出来るスポーツ」があるがやらないかと誘われた、これが私のサッカーの始まりです。当時、アソシエイション　フットボールと言っていました。最初は上記の服装に足はハダシでした。サイドキック、インステップキックを教わったとおりにしました。と言うのはハダシなので、ちょっとはずれただけですごく痛かったからです。

このような具合でサッカーに夢中になって行きました。当時の仲間に、渡嶋九州夫さん、田中啓元さん、茅ケ崎で蕎麦屋を営んでいる長谷川さんなどがおります。ペガサスには５０歳代に入って、１０年余り過ぎた現在もペガサス６０でやっております。

（昭和３０年　鎌倉学園高卒）

３．サッカーつれづれ

シニアチーム　黄瀬　直彦

湘南ペガサスサッカークラブ２５周年おめでとうございます。

私はこの湘南ペガサスに入れてもらい、サッカーの輪がとても広がり、楽しみも大きくなりました。サッカーを続けていて良かったとつくづく思います。

ところで、私のボール蹴りの経歴は以下のようなものです。（特にたいしたことはありません。）
サッカー（ボールを蹴ること？？）との出会いは、中学３年の冬、バレーボールを蹴り始めたときかな。中学（鵠沼中）時代はピンポン部にて、小さいボールを相手に手を振り回していたっけ。（まだ、サッカー部がありませんでした。）高校（茅ヶ崎北陵高）に入って、やっと大きいボールを相手にしたな。よく、ニードルでチューブに穴をあけたな。先輩はきびしかった。（坪井さん？？）
大学（東海大）では、札幌で２年間本土の力（？？）を見せ付けてやったな。（本当か）
その後の２年間は清水でコテコテにやられたな。社会人になってからは、アンテロープスで暴れまくったな。（転びまくってた？？）
今、４０歳を過ぎ５０歳になり湘南ペガサスで楽しんでいます。

アンテロープスの時代には、日曜日は試合か辻堂海浜公園等でボールを蹴っていて、サッカー漬けでした。本当にサッカーの好きな人間の集まりでした。私は日曜日にサッカーのために集まり散っていく「蜘蛛の子チーム」と思っています。（今でも）湘南ペガサスにもアンテロープスの残党がいて、昔のイメージを思い出しながら、プレーしています。

子供（小学生）の指導も楽しいですね。湘南ペガサスの方々の中にも少年少女の指導者も多いと思います。今の子供たちはいいですね。テレビでは世界のレベルの高いゲームを見れるし、子供たちのＯＢが側でナマのプレーを見せてくれるし。

私は週末になると、楽しくて、楽しくて。小学生相手にボールと戯れ、同世代でボールを追い回し、取り合い。これからも、湘南ペガサスでお世話になりますので、宜しく御願いたします。

乱筆乱文にて失礼いたしました。

（昭和４６年　茅ケ崎北陵高卒）

４．爺（Ｇ？）リーグ雑感　―　怪我にまつわる話

シニアチーム　坂部　治郎

湘南ペガサスシニアでプレーさせていただいて、２年が過ぎました。

私は昭和５８年（‘８３）から１７年間にわたりケニアでマカデミアナッツに係る仕事をしておりました。ケニアは、陸上の中長距離選手がつとに有名ですが、サッカーはあまり強くはありません。しかし、世界の多くの国がそうであるように一般大衆には最もポピュラーなスポーツです。

赴任して、最初の数年間は、月に１回ぐらいの頻度でボールをけるチャンスがありましたが、本帰国までの後半の１０年以上は、年二、三回がいいところでありました。そのうち一回は、子供が通っていた日本人学校で、子供たちと、そしてもう一回は現在のフットサルに近い形式のミニサッカーで、ワールドカップ（首都ナイロビ駐在の各国駐在員のお遊び）に参加しておりました。

日本に帰れば、四十雀というものが存在しているということを聞いておりましたが、本帰国の時には既に齢５０を越え、シニアからのスタートとなりました。

サッカーをリーグでやるようになって、自分の体がサッカーから如何に遠ざかっているかということに気が付きました。ケニアにいる頃は、自分の体をいじめるのは、主にテニスとジョギングでしたが、こちらに戻ってサッカーを始めたら、ボールを使い、ボディコンタクトをするスポーツであるサッカーの動きに自分の体がいかにフィットしていないかという悲しい現実に向き合わねばなりませんでした。当然の結果としていくつかの怪我を経験することになりましたが、この２年間で痛めた以下の部位は、私にとって初めてのものばかりです。

1）腰　（オーバーヘッドキックを思わずやってしまい、落ち損なって傷めたもの）
2）右太もも裏、右ふくらはぎ、左膝内側の肉離れ　（ろくにストレッチをせず、ボールを蹴った時におきたもの）
3）肋骨　（ひびあるいは骨折、この２年間に３回）
4）踵の炎症、アキレス腱の炎症

自分のサッカーの記憶は３０代前半の頃までしかなく、サッカーにおける体の動きの記憶もその頃で止まっていました。従って,リーグで始めたころは、体が昔の動きをしようと無理を重ねていたようです。その典型が、上記のオーバーヘッドキックにありますが、後で皆さんから、そういう無理をして、時々、救急車で運ばれる人がいるのよねと言われて、ゾッといたしました。その時は何とか、家に戻りましたが、翌日は起き上がれず、会社は欠勤。

次の典型が、アップ不足による筋肉の怪我です。　あまり準備体操などは好きではなかったものですから、グラウンドに出ればすぐにボールを蹴り始めるというタイプでした。その結果が、このざまであります。この何回かの失敗を経験しまして、その後、試合前にボールは蹴らなくとも、ストレッチだけはするようになってから、傷めることが殆ど無くなりました。

三番目の肋骨の骨折またひびは、若いころには全く経験したことがありません。　最初のケースは、試合中に傷めたはずなのですが、いつもらったのかも判りません。　床の中に入ってもろくに寝返りもできません。　痛みがいつになっても引かないのでおかしいなあと思っているうちに別件で医者に行くことがあったので、ついでに見てもらったところ、ドクターからああ折れてましたねという具合でした。しかし、こう何回も痛めるというのは、歳をとって骨がもろくなっているからなのでしょうか。

４番目のケースは、浅倉さんのアドバイスによる、踵の下に入れる500円のスポンジと、本屋で立ち読みしたテーピング論のアキレス腱を保護するテーピングで解消しました。これが、一番安上がりでした。

この他に、“通常の”捻挫、打撲などはすでに山盛りいっぱい状態。
楽しいサッカーライフをエンジョイするためには、怪我はしないに越したことはありません。しかしサッカーはやはりそれなりに激しくやらねば面白くありません。従って怪我の可能性とはいつも背中合わせなのはいたしかたありますまい。

この２年間の教訓は、月並みではありますが、まず基本の体調管理、試合前のテーピングとストレッチ、アップはしっかりやる。　プレー中に無理をするべきところとそうでないところを嗅ぎ分ける　―　でもこれが非常に難しい。判れば、ケガなんかしないはずなんですが。　どなたか、もっと効果的な怪我回避法をご存知の方、お助けください。

（昭和４４年　湘南高卒）

５．２５年目の思い

ジュニアチーム　田　中　　聡

湘南ペガサス２５周年とのことですが、私も湘南高校を卒業してちょうど２５年になります。７４年西ドイツワールドカップで、ヨハン・クライフのアルゼンチン戦のスーパー・ゴールがサッカーの感動との出会いでした。当時サッカー部のなかった附属鎌倉中３年生だった私は、野球部で６番ショートでしたが、野球部引退後は、サッカーばかりして遊んでいました。湘南高校入学と同時に、同じ中学から上がった友達数人と憧れのサッカー部入部。この友達のうちで一番素質のあった人が、１年の終わりに腎臓病で急逝。現在の職業を選んだのはこの時でした。結局、数人のうち最後まで残ったのは私だけでした。

高校時代は、１つ上は国体選抜の八木先輩、１つ下は湘南を久々の全国大会に導いた藤塚君の学年に挟まれた５

３（ゴミと呼ばれた）回でしたが、今もペガサスで一緒にプレーする新倉君やＯＢ会の要職にある武藤君などのすばらしい同期に恵まれました。高校からサッカーを始めた私は、基本を最初の３ヶ月で徹底的に叩き込まれ、１年の秋には、あたりの強さを買われて雨中の新人戦に出場もさせてもらいました。初心者で、鈍足。懸垂ができなくて体育も”Ｃ”だった私は、何とかボールだけでも蹴れるようになろうとして、毎朝横浜から早くきて、今も残る湘南名物のスタンドに向かってひとりで蹴っていました。おかげで止まっているボールは蹴れるようになりましたが、どうしても天性のスピードの無さが克服できず、鈴木中先生には３年間怒鳴られ続けました。鈴木先生は、私の現在までの人生の３大恩師の一人と思っています
。

しかし、その後は腰痛や肉離れと戦いながら、３年最後の総体予選まで頑張りましたが、結局、現役最後の試合は出場できませんでした。そして、その試合の相手、横須賀高校には、同じ中学の野球部だった仲間が２人レギュラーで活躍していました。善行の体育センターでのこの試合後、ベンチで一人悔し涙を流した事は今でも鮮明に記憶しています。

大学は地方の医学部に進んだ関係で、しばらくご無沙汰致しましたが、平成11年に東京に帰り、すぐペガサス・ジュニアに入れていただきました。３年間でリーグとトーナメントで１点づつ入れさせてもらいましたが、先発出場は数えるほど、とくに一昨年の四十雀１部では全く戦力になりませんでした。現在は、東京に住み、埼玉県中部の病院に勤務という厳しい条件ですが、学会などを除いては何とか自分で日曜勤務の予定を組める立場ですので、月４日のうち３日ぐらいは試合に参加できると思います。諸先輩方からは、将来の幹部を期待されている節もありますが、何と言っても自分としましてはレギュラー獲得が今年も目標です。２５年目の目標達成に向けて頑張りたいと思います。

（昭和５３年　湘南高卒）

６．湘南サッカーと共に

ジュニアチーム　遠　見　　治

私が湘南サッカーと出会ってから、３０年余りになります。大学時代に始まり現在に至るまで、並々ならぬ関わりを持って、多くのサッカー仲間を得る事ができました。最初のきっかけは、４８回卒の宵木君からの湘南クラブへの勧誘に始まり、湘南クラブの試合だけではなく、湘南高校のＯＢと一緒に、正月や夏の合宿の時に紅白戦などに参加させていただき、まるで湘南高校のＯＢの様に楽しませてもらいました。ちなみに私は、鎌学の出身です。

大学時代には体育会系のサッカー部を中心に活動していましたが、社会人になると一時期サッカーをする機会が薄れ、サッカーを忘れかけていました。そんな折りに、湘南クラブで一緒だったメンバーが中心となり、サッカーに限らず体を動かす機会を作ろうと「湘南ボールクラブ」を結成し、同じような同好会や社会人のチームを相手に試合を組み、楽しんでいました。また、このときサッカーウイドウを作らないよう夫婦でもできる「ソフトボール」や「綱引き大会」に参加することもありました。

子育ての時期には活動は控えめになっていましたが、３６歳になると茅ヶ崎の「オールドリーグ」に参加できることを湘南クラブ時代からお世話になっていた渡辺さんから知らされ、月に一試合ほどサッカーができるようになりました。「オールドリーグ」は少年サッカーを支える父親が中心になってチームを作りリーグ戦を行っています。当時は、初心者の方もいたためか試合の内容は、適度に楽しめるものでした。

４０歳になると湘南ペガサスでプレイできることを知り、期待して参加すると、レベルの違いに驚くと共に、自分の体力や技術の無さに失望し、自信を失いそうでした。しかし、サッカーをする事が根っから好きだった事もあって、まずはメンタルの面から調整し、日頃運動から遠ざかっていたので、時間を作って運動をするよう心がけなんとかチームの足を引っ張らないように努力しました。その甲斐もあってか、今日まで続いています。

ペガサスジュニアは今年で１０年目になりますが、県議長杯準優勝・群市四十雀一部リーグ三位・二部降格・二部準優勝＆一部昇格・・・昨年度はやっとの思いで三部降格を凌ぎ二部残留をしました。一番記憶に残っているのは、三年前の二部準優勝の最終戦です。チームの仲間がやり繰りして全員集合、対戦相手も最終戦とあって、開始当初は気迫あふれる試合展開でした。ボランチの関君から右に開いたサイドバックの私にパス、そして左前のオープンスペースに走り込んだ吉田君にクロスパス、それをドリブル突破して鮮やかな先制ゴール。結局、４　０と圧倒的な勝利のもとに一部昇格を決めました。今でもよく覚えています。その他にも試合ごとに何らかの良いプレイ、

もちろん悪いのもありますが、そういった記憶が日々の日常と非日常を交差して、楽しく毎日を暮らす糧になっていると思います。このような糧を得る機会を与えてくれる、湘南サッカーに感謝しております。今後とも宜しくお願いします。

（昭和５１年　鎌倉学園高卒）

７．　１５年間の思い出（今60歳還暦）

シニアチーム　藤　田　勉

藁品さんに誘われて、２０年間継続していたＩＢＭ　ＳＯＣＣＥＲ部を退部し　４５歳の時に湘南ペガサスに入部させて頂き、１５年経過しました。

この１５年間、毎週末、皆様に大変お世話になり感謝しています。

ペガサスのサッカーを通じて素晴らしい人達に会うことが出来、又一生懸命走る事で、いい汗、いい疲労、ストレス発散をすることが出来ました。精神的、肉体的に健康で、仕事に邁進できたのも皆様のお陰と感謝しています。

私は、４５歳から５５歳迄、四十雀 一部に参加させて頂いただき　５６歳（平成１１年　１９９９）から五十雀に参加させていただいています。この15年間で印象深い事は

１）平成１１年　第３回五十雀リーグでの優勝

２）平成１４年　第６回五十雀リーグでの優勝

などです。

自然現象で老化は、避けられませんがＳＯＣＣＥＲをすることによりその進行を遅らせている感じが致します。素晴らしい友と楽しい老後を送るためにも是非、皆様の仲間の一員であり続けたいと願っております。今後とも宜しくお願いします。

（昭和３６年　修道高卒）

８．フレッシュマンの今

ジュニアチーム　水　上　雅　樹

昨年春から藤沢に戻り、今年からペガサス加入資格を得た。４０才以上のチームでプレーすることに関しては、正直、なめてかかっていた部分があった。船橋リーグで２０才前後の若者とも対戦していたことを思えば、母の疾病、他界、転居、工場閉鎖、転職などのために実質１年のブランクがあることを加味しても、もの足りなさを感じると思っていた。だが、ピッチで見た現実は、自分の抱いていたイメージとは全く異なるものであった。白銀の混じる髪をなびかせたプレーヤー達が、いぶし銀のパスを繰り出し、矢のようなシュートを放つ。ここ数年のプレー環境よりも、実際は厳しかったのである。ポイントを突いた動きと正確なパスやシュートの方が、走力はあっても無駄な動きやパスミスの多い若者のサッカーよりも、対応するのが難しいことを痛感した。暖かい浜風を受けてプレーしていると、少年時代に戻るようで、懐かしさがこみ上げてくる。先輩達に負けないように、コンディションを整えよう。

高校時代に１５才上の先輩達と練習試合をしたことを覚えています。そのときの経験から、異なる年代のプレーヤーとピッチを共にすることは、サッカーのプレーの質を高めるだけでなく、人間的にも幅を広げ、将来の生き方を考えるうえにおいて大変役立つものだと感じています。地元に帰ってきて、その頃からの顔見知りの先輩達と、また一緒にプレーする機会を得られたことは、私にとって幸運だったと思っています。また、今後のペガサスの活動が、高校OBの枠を越えた地域に根付いた活動になることを願っています。異なる経験をされた方と同じチームでプレーすることで新しいものが得られ、地域の活性化にも繋がると思うからです。少年サッカーのコーチを務められている方も多いと聞いています。将来、ペガサスが地域サッカーの拠点のひとつになってくれていることが夢です。私自身も好きなサッカーで、いいプレーを続けることが、地域文化の一端を担っているのだと勝手に解釈して、そのスタート台に立ったことに喜びを感じています。

（昭和５６年　湘南高卒）

あ と が き

一昨年（平成１３年）、ペガサスを立ち上げ、育ててこられた大内健嗣さんが他界（享年６４歳）され、昨年は、ペガサスの堅守を支えてこられた佐伯修三さんが急逝（享年６１歳）されました。ふと思いつき指折り数えますと発足後２５年を迎えようとしていることに気付き、これは記念誌を編まざるべからずと彼方此方打診したところ大方のご賛同が得られ作業が始まりました。

前回１５年誌では、大内さんがご経営の会社の方の勤労奉仕を得て印刷原稿を纏めて下さいましたが、今回はパソコン利用のご寄稿がが殆どで、手間と費用を大幅に縮減できました。

桑田孝さん、鈴木中さんから懇ろな祝辞を頂けたのもペガサスが基礎を固めた証しとも云え、ご同慶の至りです。

またクラブが三つのチームから構成されるようになりましたが、緊密な連絡をとりながら編集でき、発行に至ったことにも感謝し、クラブとして健全に発展してきたおかげと考えます。

たくさんの方のご協力にお礼申し上げますが、とくに、山本修さんが緻密に整理してこられた古い記録などにもとづく助言を下さったこと、浅倉　泰さんがパソコンを駆使してカラーページを制作して下さったこと、渡嶋さんがご縁のあるところの機器使用をお手配くださったことなどを報告いたします。

また県リーグの勝敗表は郡市連盟のご好意によりプログラムから転載させて頂きました。謝意を捧げます。

次回はいつになるのか、昨年から始まった日本協会主催大会での快挙を記念して発行する日のくることを期待しています。また会員のより多くが寄稿されることも望んでおきたい。（今回資料散逸できちんと整理できなかった古河マスターズ大会などの記録も何処かに残しておきたいものです）

会員諸子の益々のご健勝とペガサスの発展をお祈りします。

（シニアチーム　総務担当　篠田　亮　記）

発行者　湘南ペガサスサッカークラブ
代表者　中郡大磯町東町　１－７－１４
井上　孝